

第IV章 土器型式分類

第1節 分類方法

土器は形成分類を行い、兼久式土器の特徴を示すデーターを得るために行う。これまでの資料の中にある一定の基準を用いて分類し、時間・空間幅の上に秩序付けを行い資料化にする。そのためにここでは「形式」「型式」「様式」の三つの概念を用意する。

1. 「形式」(form) 機能・用途にもとづく分類単位である。鉢、甌、壺、広口壺、細口壺など小形式にわける。
2. 「型式」(type) とは同じ形式に属するものを形質特徴（性質：属性）の差異によって細分した分類単位のことという。
3. 「様式」(style) とは同地域・同時代に行われた一群の型式は同一の技術体系である。お互いに補い合って生活の要求を満たしているところ有機的な複合体である観点から一括したものと言う。（物のセットの存在のありかたを示す）型式を越えた同時期の型式群の総称単位として用いる概念である。

ここでは沖縄後期土器の時期区分を参考にして、安良川遺跡出土の土器を分類する。
はじめに口縁部と底部の資料と胎土の対応関係を明らかにする。その上で土器の形式を把握する。そして、出土区別に特徴のある口縁部と底部で形式分類を行い、その改良が行われる過程の型式分類を試みる。

ア. 口縁部

口縁部の特徴は器形による「外反」「内反」と大別し、特に壺形土器は「広口口縁」「細口口縁」「方形口縁」などに分類される。そして、兼久式土器の定義から外れるものは特殊土器として扱った。文様別、胎土の違いを第8表文様別胎土分類に表わした。これは胎土により口縁部の形態が明確にされるか1～6まで文様別に分類を行ってきた。

1. 無文土器
2. 凸帶文土器
3. 凸帶刻目文土器
4. 凸帶、沈線文土器
5. 凸帶刻目、沈線文土器（凸帶の上下も細分類）
6. 沈線文土器

イ. 特殊土器

1. 沈線文土器
2. 縦位、横位貼付凸帶文土器
3. 縦位部分貼付文土器
4. 横位部分貼付文土器
5. 刻目凸帶文、刻目口唇部土器

以上は口縁部、頸部の文様による分類タイプ。

ウ. 底部の分類

兼久式土器における底部の形式分類は口縁部同様に、「鉢」と「壺」に分類を行う。鉢形土器の底部には、「直行平底底部」「くびれ平底底部」に分類される。壺形土器底部もいくつか分類されているが、今回は、壺形で一括した。

型式分類を行った資料は胎土によって砂質、泥質に分けてその%を出すことにした。その結果が型式分類を行ったものと胎土の%にどのような特徴が得られるかを試みた。

兼久式土器は底部が「くびれ平底」をなすのが特徴とされている。くびれ平底とされる底部も下記のように分類を行い、その概念も示した。くびれ平底は底面が土器を積み上げる部分より外に出ていることであり、くびれの長短は型式の違いによることも考えられる。そのため土器の底部の特徴と胎土そして製作技法に着目し、形式をA、Bの2分類に大別し、A-I, A-II, B-III, C, Dに分類をおこなった。

エ. 形式分類

A - I くびれ平底底部

胎土（砂質底部　泥質底部　不明）

A - II 直行平底底部

胎土（砂質底部　泥質底部　不明）

B - III やや丸みをおびた平底底部

胎土（砂質底部　泥質底部　不明）

C 不明（どちらかはつきりしないタイプ）

胎土（砂質底部　泥質底部　不明）

D 特殊土器

胎土（砂質底部　泥質底部　不明）

A - I 類 くびれのない底部の特徴

円形の粘土板を使用し、粘土板の端、または側面から粘土ヒモで積み上げる輪積み技法で行なっている技法である。底部内面は皿状ないし、ゆるやかな直角状をなす。比較的底部厚も薄手でII類よりも小型が多い。底部の径が小型のものが目立つ。胎土分類の%は第4表に示されているとおり砂質が73%である。

A - II 類 くびれ平底の特徴

やや厚めの円形粘土板を使用し、粘土板のやや内側から粘土ヒモを積み上げる輪積み技。I類とは積み上げる位置が明らかに違う。厚手の粘土板を使用することと粘土板の端を残して積み上げると、おのずからくびれ平底になる技法である。薄手の粘土板を使用していくびれ平底にするには底部の外側下部に粘土をつけたとしてくびれをつくっている。この場合は底厚が薄くなっているものもある。底部内面は主に半球形をなしている。胎土の%は砂質が81%になる。

B - III類 壺型土器の底部の特徴

I類、II類との違いは粘土板を曲げて底部を作るため底部がやや丸みをおびている。また、安定させるため底部を押えて平底にする技法が行われるためくびれ底にはならない。比較的広がった底部になる。特異な例として丸みをおびた底部に粘土板をつけたした平底土器の例もある。壺形土器の底部も数タイプに分類が可能であるが今回は一括して行う。胎土分類は泥質が67%を示している。

底部による形式分類は鉢形土器と壺形土器に分け、さらに鉢形土器を、直行底部、くびれ底部に分けた。壺形底部は一括でまとめたが分類可能である。

型式分類を行った資料は、胎土分類による異差を求めた。その結果第4表底部胎土分類が示すとおりとなった。

兼久式土器における鉢形土器は砂質がA-I 73%, A-II 81%, 壺形土器は、泥質が67%を示す結果を得た。

第2節 土器の胎土

土器の質感は手で触った質感と土器の胎土を立体顕微鏡で観察した結果、大きく「砂質」と「泥質」に大別した。観察では砂質、細砂質、泥質の三つに分けたが、立体顕微鏡での観察の結果キラキラ光る微粒子と黒く光る微粒子が観察できる。手で触った質感の違いは焼成の良好なものと悪いものの違いであると判断したため泥質に近い細砂質は泥質と同じものとした。

砂質=サンゴ粒や長石、石英の粒子を多く含み、中には1 mmの長石などが含まれるものも観察できる。

泥質=ざらざらした質感があり、細かい粉状が手に付く、胎土には粒子の粗いものはほとんど含まれず、黒や黄色に光る鉱物を多く含んでいるのが観察できる。当初、「泥質」、「細砂質」、「砂質」と3つに分類したが微粒子の判別に時間を要するため、細砂質と泥質を同一として扱うこととした。ただし、プレバートなどの胎土分析から分類は可能ではないかと考えられる。

第3節 土器分類基本資料

安良川遺跡の土器分類は1形式 2型式、3様式、4胎土、5色調 6実測記録などカードにすべて記入した。土器のリストを作成し、実測、写真、胎土、焼成などの記録も入力してすべての情報をデータ化しようという試みである。実測可能な口縁部、口縁直下、底部をあわせた土器資料759点の資料から得た情報になる(第5表形式分類)。土器出土状況は第33図土器・骨出土分布図のとおりである。土器出土分布第33図はまとめて出土した部分を一括して取り上げたカウントである。

第4節 土器型式分類

兼久式土器の型式分類の定義と方法は第IV章第1節で記した通りである。モンテリウスの型式

論から日本型式論に、大きな影響を与えた小林行雄の弥生土器研究を絡めながら型式論で用いた型式論を参考にした。

形式は壺（広口、細口、方形口）・鉢（深鉢・浅鉢・甕）に分類され、それぞれ小型土器も含まれている%である。（第5表 形式分類表）。

型式は上記に分類されたそれぞれの土器の形質的特徴を口径、文様、底部に求めて分類を行った。鉢形土器はさらに深鉢、浅鉢、甕に分類を行っている（第6表 型式分類）。

様式は同一型式とセット関係にもとめている。

1. 壺形土器の型式分類

壺形土器の型式分類は口縁部・頸部を含めて100個の土器片を対象に行った。胎土は泥質が86%砂質が14%を示す（第7表 壺形土器口縁部胎土分類表）。底部については壺形土器をB-III類として27個を対象に行った。その結果、泥質が63%、砂質が37%を示した。（第4表 底部胎土分類）。胎土の分類では泥質・砂質に大まかに分類を行ったが泥質、砂質の中間として「細砂質」とされるものもある。しかし、その基準を明らかにすることが出来なかつたため今回は大きく2つに分類を行っている。その結果、壺形土器の胎土は泥質が大半を占め、鉢・甕型土器の胎土は砂質が大半を示している。

壺形土器の底部はやや丸みを帯びた底部と、底部を2重底状に付け足したような底部、平底の底部などに分類できる。壺形土器はB-III類に分類されている。

口縁部、頸部の型式は方形口縁、片口口縁、円形口縁、広口口縁等に分類される。文様についても無文、列点文、沈線文、凸蒂文、凸蒂刻目文、凸蒂刻目沈線文等に分類される（第36図土器型式分類図）。鉢形土器と同じ文様で、一様式をなしていることが分かる。（土器の詳細については本文土器報告を参照）。文様別による胎土分類は口縁と口縁直下を対象に行った。その結果 第8表が示すように文様によって壺形と鉢形の対比を表すデーターを得ることができた。兼久式土器の特徴を一番良く示すのは第3様式と第4様式に多いことが判かる。

2. 鉢形土器の型式分類

鉢形土器の型式分類は114個を対象に「深鉢型土器」「浅鉢形土器」「甕型土器」の3タイプに分類を行った。その結果深鉢型土器が38%、浅鉢形土器が11%、甕型土器が61%、不明9%である（第9表 鉢型土器型式分類図）。安良川遺跡における土器型式は鉢形が主流を示していることになる。

深鉢型土器

深鉢型土器は器高が口径の3分の2以上のものとし、2分の1から3分の1ぐらいのものを浅鉢とした。形質的特徴は口縁部の特徴と底部の特徴、文様の特徴により分類を行った。

口縁部の特徴

口縁部は大きく内反と外反に分かれ、そのほとんどが外反になる（第10表 口縁タイプ分類）。円グラフによる%は外反している土器を直口に近いもの、強い外反、やや外反などに分けたものである。その結果、大きく直口と外反タイプに分かれていることがわかる。

文様の特徴

文様は壺形土器と同様に無文、沈線、凸帯文、凸帯沈線、凸帯刻目、凸帯刻目沈線、特殊、不明の8分類にした。特殊土器は今回示した兼久式土器の概念から外れたものである。土器が小片のため文様の特徴が明らかにされないものを不明とした。その結果は「口縁・口縁直下文様分類」円グラフの示すとおりである。凸帯に刻目を有する土器が20%と多く、沈線文様9%，無文32%，凸帯刻目沈線文13%となり、特異土器が22%も入っていることが分かる（第9表 口縁・口縁直下文様分類グラフ）。

底部の特徴（第34図、35図）

鉢形土器の底部は直行平底をA-I類、くびれ平底をA-II類として分類を行った。いずれも底面に葉痕を有している。

A-I類は底厚が薄手と厚手をなしているがいわゆる「くびれ」が顯著でない。土器製作時に底面に使用されている粘土板の一部が出ているものなどを含めている。底径が小さく底厚が薄いものは小型土器にはいる。

A-II類はいわゆる「くびれ平底」を指す。底厚が厚いものが多く、2、3cmのものも含まれ、低厚が厚いとくびれ部分が顯著に現れている。内面は主に半円形状及び、半円形状にちかい形状をなしている。

様式

安良川遺跡における土器型式分類は鉢、甕、壺に分け、第5様式まで分類を行った。

第1様式 タテ凸帯+沈線、タテ刻目凸帯+沈線

第2様式 沈線、沈線+口唇刻部に連点文

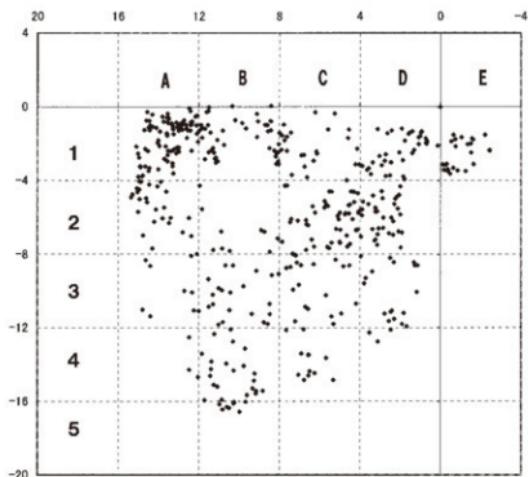
第3様式 刻目凸帯+沈線

第4様式 凸帯、刻目凸帯

第5様式 無文

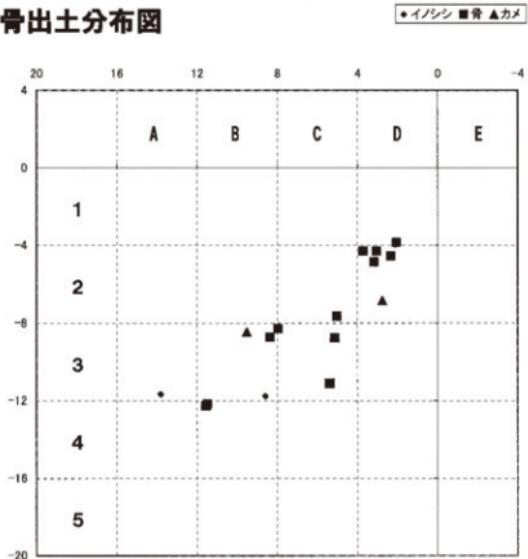
以上の土器型式であるが個々の型式組列を完全に成立させるに至っていない。本報告書では形式と型式、様式に分類を行い、口縁部の文様の特徴、底部の特徴を胎土の%を出してデータを得る試みを行った。これらのデータを表示することによって今後の土器偏年資料に加えたいと思う。

土器出土分布図



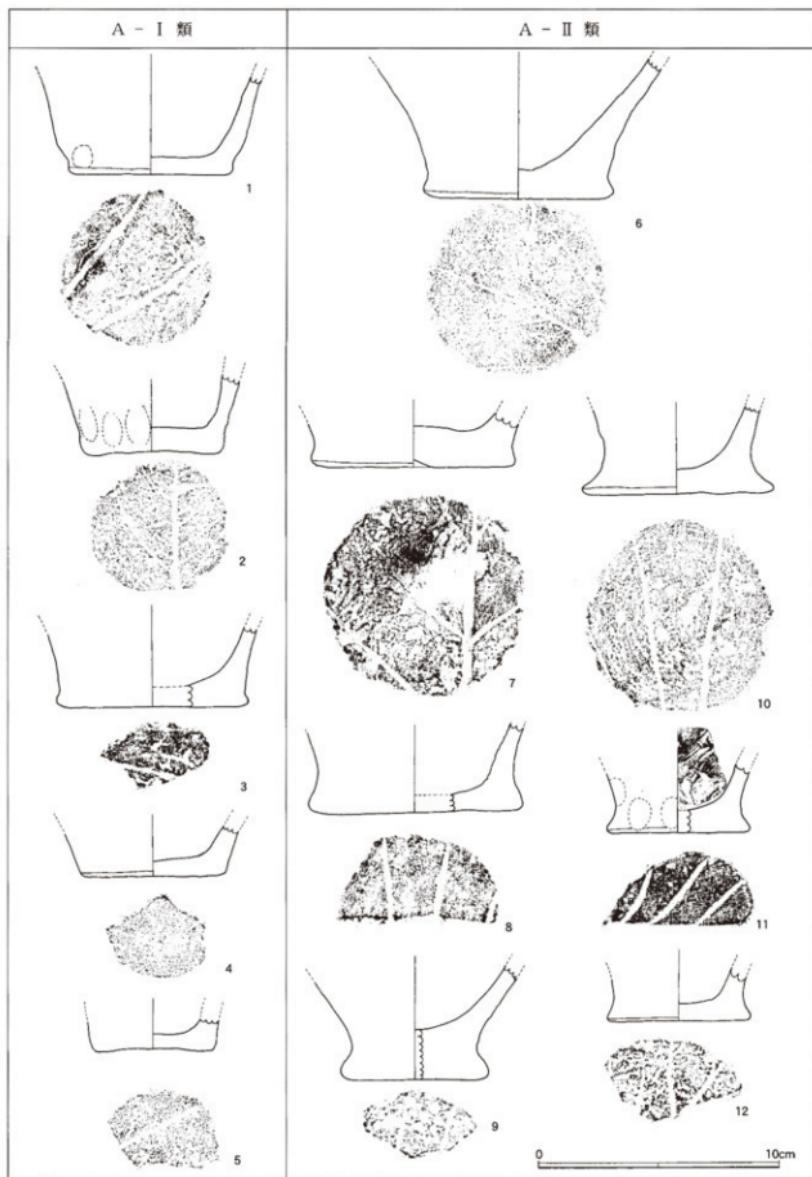
総数 460

骨出土分布図



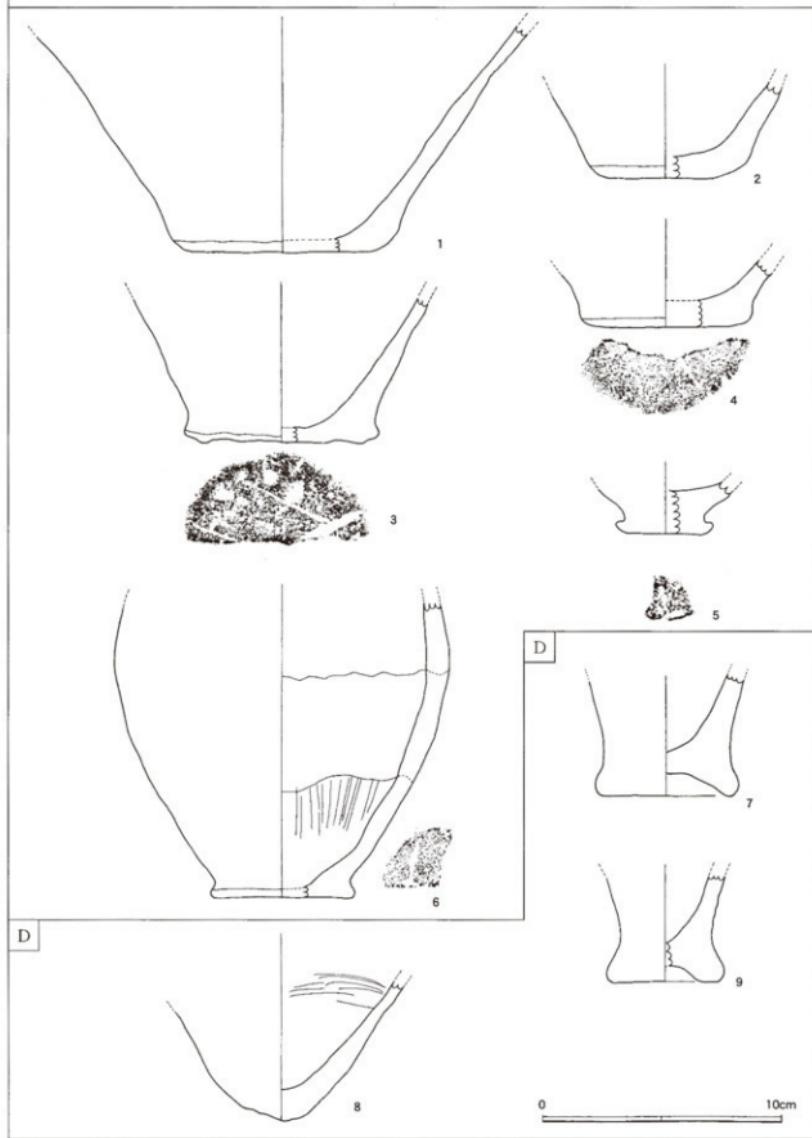
イノシシ	2
カメ	2
骨	12
総個数	16

第33図 土器・骨出土分布図



第34図 A-I, A-II類 底部実測図

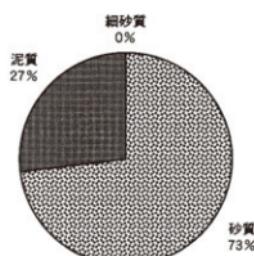
B - III 類



第35図 B-III類底部実測図（1～6） 8は丸部 7, 9は脚台

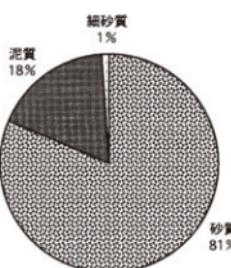
タイプ	胎土件数	タイプ計
A-I	砂質 35	48
	泥質 13	
	細砂質 0	
A-II	砂質 65	80
	泥質 14	
	細砂質 1	
B-III	砂質 9	27
	泥質 18	
	細砂質 0	
C	砂質 21	28
	泥質 7	
	細砂質 0	
D	砂質 5	5
	泥質 0	
	細砂質 0	
	総計 188	188

A-I



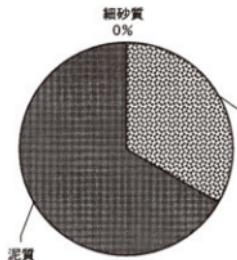
■ 砂質
■ 泥質
□ 細砂質

A-II



■ 砂質
■ 泥質
□ 細砂質

B-III



■ 砂質
■ 泥質
□ 細砂質

※カクラン・表探合まず

第4表 底部胎土分類

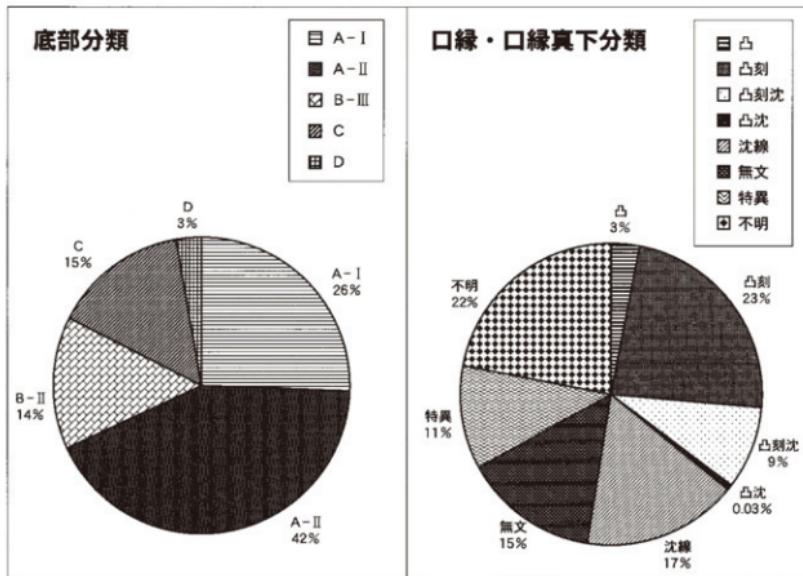
	底 部				口 線・口 線 真 下								
	A-I	A-II	B-III	C	D	凸	凸刻	凸刻沈	凸沈	沈線	無文	特異	不明
A1	14	4	2	9	0	5	21	8	0	17	8	6	22
A2	2	7	3	0	0	0	5	4	0	5	3	8	6
A3	2	2	2	1	0	0	2	3	0	3	1	3	6
A4	0	2	0	0	0	0	4	2	0	3	0	5	5
B1	4	8	0	3	0	0	10	0	1	6	4	2	10
B2	0	4	0	0	0	2	1	1	0	4	2	0	1
B3	0	5	1	1	0	0	6	2	0	6	5	3	1
B4	0	6	3	0	0	0	8	2	0	6	5	10	0
B5	1	5	1	0	0	1	2	2	0	1	6	4	2
C1	3	7	1	2	0	4	14	6	0	10	4	1	13
C2	7	4	3	2	2	0	20	6	0	9	9	0	24
C3	0	4	0	2	0	1	2	5	0	2	7	1	15
C4	0	4	0	3	0	0	7	3	0	1	4	1	1
C5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D1	3	6	5	1	1	0	12	4	0	7	3	8	9
D2	4	3	2	1	0	2	6	1	0	8	13	7	7
D3	3	4	2	2	2	0	7	2	0	2	4	0	1
D4	2	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
E1	3	3	2	1	0	1	6	0	1	3	4	4	2
E2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
ベルト	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0
合計	88	90	80	27	15	15	17	33	32	12	95	85	126

※カクラン・表揃合まず

底部個数 188

口線・口線真下個数 571

合計 759



第5表 形式分類

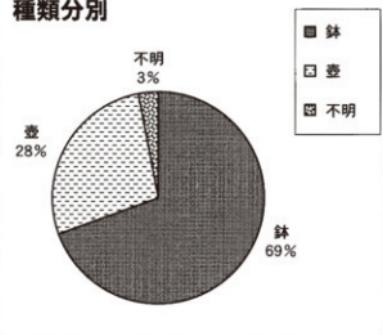
※カクラン・表採合ます

	凸	凸 刻	凸刻沈	凸 沈	沈 線	無 文	特 異	不 明	計
鉢	3	45	20	2	15	41	38	2	166
壺	4	18	2	0	5	19	14	4	66
不明	0	0	0	0	1	0	1	5	7
統 計									

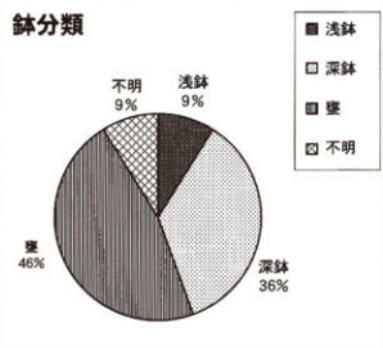
鉢	凸	凸 刻	凸刻沈	凸 沈	沈 線	無 文	特 異	不 明	計
浅 鉢	0	0	1	0	2	1	0	0	4
深 鉢	0	3	3	2	0	6	2	0	16
甕	0	5	2	0	0	6	8	0	21
不 明	0	1	0	0	2	1	0	0	4
計	0	9	6	2	4	14	10	0	54

壺	凸	凸 刻	凸刻沈	凸 沈	沈 線	無 文	特 異	不 明	計
広口壺	1	4	0	0	1	9	1	0	15

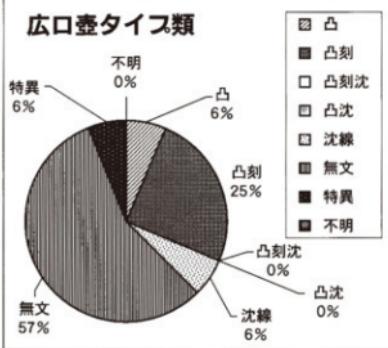
種類分別



鉢分類



広口壺タイプ類



第6表 型式分類

※カクラン・表採合まず

砂質	泥質	壺個数
14	86	100

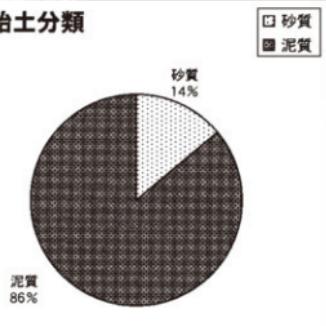
名 称	底 部	口 線 部	口 線 真 下	胴 部
	11	46	20	23

タ イ プ	胎 土	個 数
A-I	砂 質	0
	泥質・細砂質	0
A-II	砂 質	0
	泥質・細砂質	0
B-III	砂 質	3
	泥質・細砂質	5
C	砂 質	0
	泥質・細砂質	1
D	砂 質	1
	泥質・細砂質	0
凸	砂 質	1
	泥質・細砂質	3
凸刻	砂 質	1
	泥質・細砂質	12
凸刻沈	砂 質	0
	泥質・細砂質	2
凸沈	砂 質	0
	泥質・細砂質	0
沈線	砂 質	0
	泥質・細砂質	5
特異	砂 質	2
	泥質・細砂質	12
無文	砂 質	2
	泥質・細砂質	17
不明	砂 質	2
	泥質・細砂質	2
	計	77

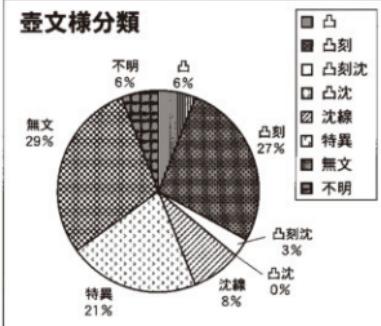
広口壺文様分類

凸	件 数
凸刻	件 数
凸刻沈	件 数
凸沈	件 数
沈線	件 数
特異	件 数
無文	件 数
不明	件 数
	16

壺胎土分類

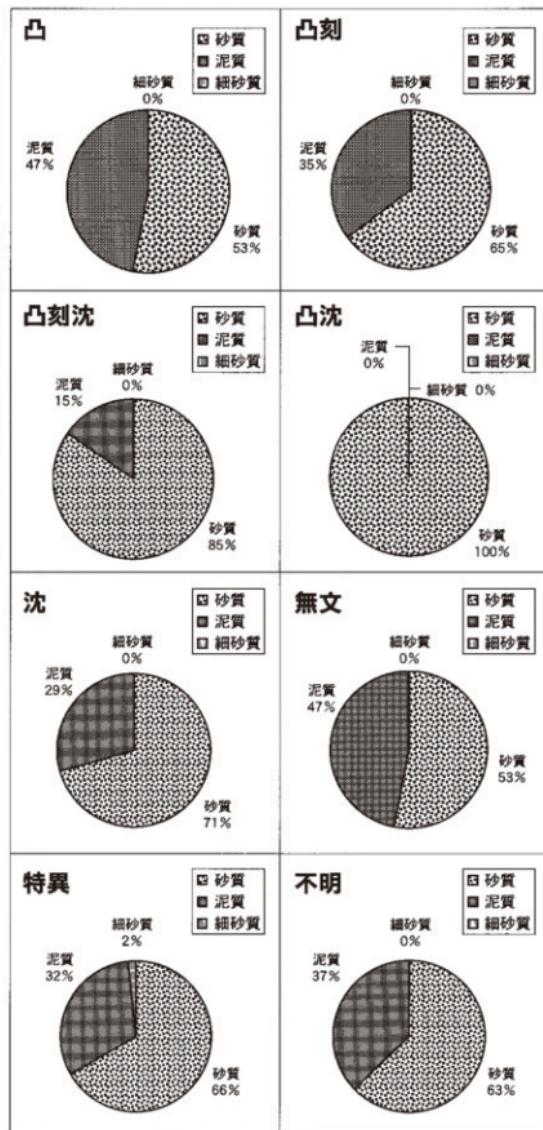


壺文様分類



第7表 壺形土器口縁部胎土分類

タイプ	胎土	件数	タイプ計
凸	砂質	9	
	泥質	8	
	細砂質	0	
凸刻	砂質	86	133
	泥質	47	
	細砂質	0	
凸刻沈	砂質	44	52
	泥質	8	
	細砂質	0	
凸沈	砂質	2	2
	泥質	0	
	細砂質	0	
沈	砂質	67	95
	泥質	28	
	細砂質	0	
無文	砂質	44	83
	泥質	39	
	細砂質	0	
特異	砂質	42	83
	泥質	20	
	細砂質	1	
不明	砂質	79	126
	泥質	47	
	細砂質	0	
総計		571	571



※カクラン・表採合まず

第8表 文様別胎土分類

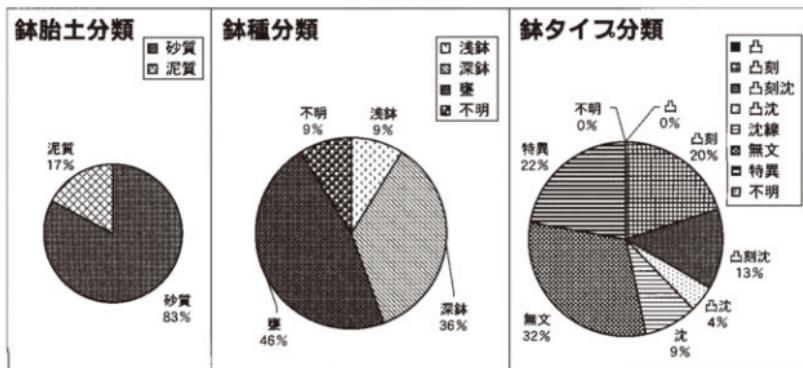
※カクラン・表採合まず口縁部・口縁直下のみ

※口縁部・口縁直下のみ

砂質	泥質	鉢個数
140	29	169

	凸	凸刻	凸刻沈	凸沈	沈線	無文	特異	不明	計
浅鉢	0	0	1	0	2	1	0	0	1
深鉢	0	3	3	2	0	6	2	0	6
甌	0	5	2	0	0	6	8	0	13
不明	0	1	0	0	2	1	0	0	4
計	0	9	6	2	11	14	10	0	46

タイプ	胎土	個数
凸	砂質	2
	泥質・細砂質	1
凸刻	砂質	36
	泥質・細砂質	9
凸刻沈	砂質	17
	泥質・細砂質	3
凸沈	砂質	2
	泥質・細砂質	0
沈線	砂質	12
	泥質・細砂質	3
特異	砂質	35
	泥質・細砂質	3
無文	砂質	32
	泥質・細砂質	9
不明	砂質	2
	泥質・細砂質	0
計		166

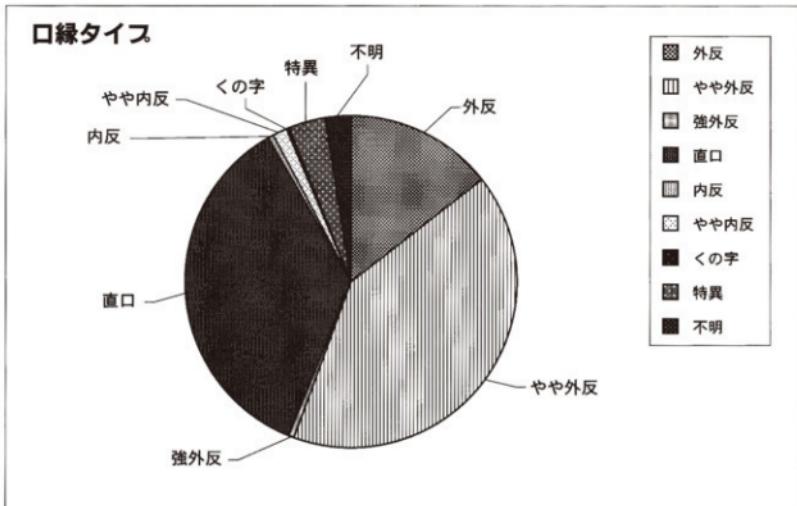


第9表 鉢形土器口縁部胎土分類

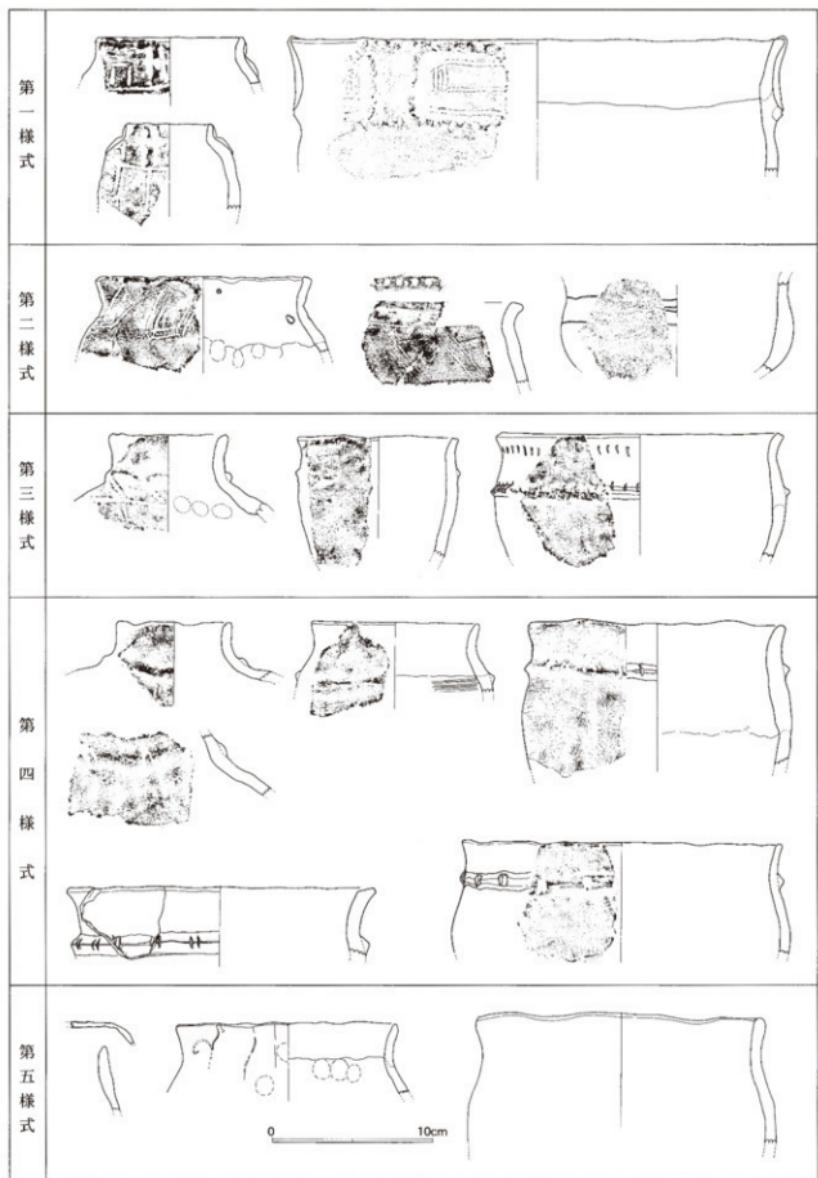
*口縁・口縁直下含む
※カクラン・表探合まず

	外 反	やや外反	強 外 反	直 口	内 反	やや内反	く の 字	特 異	不 明
A1	5	15	0	19	0	0	0	0	0
A2	3	11	0	2	0	0	0	9	6
A3	1	7	0	4	0	0	0	0	0
A4	3	3	0	3	0	0	0	0	0
B1	2	7	0	12	0	0	0	0	0
B2	1	2	0	1	0	0	0	0	0
B3	3	4	0	2	1	2	0	0	0
B4	0	9	0	6	1	1	1	0	0
B5	2	4	0	7	0	0	0	0	0
C1	5	8	0	5	0	0	0	0	0
C2	3	11	1	8	0	1	0	0	0
C3	1	7	0	4	0	0	0	0	0
C4	0	0	0	0	0	0	0	1	1
C5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D1	2	7	0	15	0	0	0	0	0
D2	3	11	0	10	0	0	0	0	0
D3	2	6	0	1	0	0	0	0	0
D4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E1	3	5	0	2	0	0	0	0	0
E2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
ベルト	1	0	0	0	0	0	0	0	0
計	41	117	1	101	2	4	1	10	7
	14.44%	41.20%	0.35%	35.56%	0.70%	1.41%	0.35%	3.52%	2.46%

284



第10表 口縁タイプ分類



第36図 土器型式分類図

器種 様式	第一様式	第二様式	第三様式	第四様式	第五様式
	広口タイプ				
直 縫					
細 縫					
不 明					

第37図 蓋型土器型式分類図(1)

器種	第一樣式		第二樣式		第三樣式		第四樣式		第五樣式	
	淺鉢	深鉢								
鉢										
深鉢										
不明										

第38圖 土器形式分類圖(2)

行番	翻訳	区	種別	鉢分類	名前	遺物名	焼成	胎土	色調 表	色調 裏	タイプ	口縁タイプ	頭部	備考	口径	口厚	底径	底厚	
A-1 001					底部	良 砂質	褐色	赤褐色	A-I					木葉痕あり/指頭痕あり		5.8	11		
A-1 002					底部	良 砂質	褐色	褐色	A-I					木葉痕あり/指頭痕あり		5	7		
A-1 004					底部	良 砂質	褐色	褐色	C					木葉痕あり/指頭痕あり		5.8	11		
A-1 005					底部	良 砂質	褐色	赤褐色	A-I					木葉痕あり/指頭痕あり		7.4	9		
A-1 006					底部	良 砂質	褐色	茶褐色	C					木葉痕あり/指頭痕あり		7.3	11		
A-1 008					底部	良 砂質	褐色	褐色	A-I					木葉痕あり/指頭痕あり		7.4	13		
A-1 009					底部	良 砂質	褐色	赤褐色	A-I					木葉痕あり/指頭痕あり		6.3	6		
A-1 010					底部	良 砂質	褐色	褐色	A-I					木葉痕あり/指頭痕あり		6.2	6		
A-1 011					底部	良 砂質	褐色	褐色	B-III					木葉痕あり/指頭痕あり裏にはけ目あり		7.2	11		
A-1 012					底部	良 砂質	褐色	褐色	A-I					木葉痕あり/指頭痕あり		5.2	7		
A-1 016					底部	良 砂質	褐色	褐色	B-III					指頭痕あり		不	6		
A-1 019					底部	良 砂質	褐色	褐色	A-I					木葉痕あり/指頭痕あり		不	9		
A-1 020					底部	良 配質	にぶい赤褐色	灰褐色	A-II					木葉痕あり		5.8	13		
A-1 032	鉢			口縁直下	良 砂質	暗褐色	褐色	特異						二又達点/輪縁み跡あり					
A-1 036	鉢			口縁直下	良 砂質	褐色	暗褐色	凸刻沈											
A-1 038	鉢			口縁部	良 砂質	明赤褐色	明赤褐色	凸刻						輪縁み跡あり					
A-1 039	壺			口縁直下	良 砂質	赤褐色	赤褐色	凸											
A-1 040	鉢			口縁直下	良 砂質	褐色	褐色	凸刻											
A-1 042	鉢			口縁直下	良 砂質	褐色	褐色	特異						指頭圧痕あり					
A-1 044				口縁直下	良 砂質	明赤褐色	明赤褐色	凸刻沈											
A-1 057				口縁部	良 砂質	にぶい赤褐色	特異							口唇部内に達点文を有する					
A-1 059	鉢	深		口縁部	良 砂質	明赤褐色	明赤褐色	凸刻沈	直口	1.6	はけ目あり	小型			8	2			
A-1 060	鉢			口縁部	良 砂質	暗褐色	暗褐色	凸刻沈	直口	1.3				不	5				
A-1 061	鉢			口縁部	良 砂質	褐色	明赤褐色	凸刻沈	直口	2.5					6				
A-1 063	鉢			口縁部	良 砂質	暗褐色	明赤褐色	特異	やや外反	不	スセン畫か?				5				
A-1 065	鉢	不		口縁部	良 砂質	暗褐色	褐色	凸刻	直口	2.4	太めの凸割目厚手				不	8			
A-1 066	壺	広		口縁部	良 配質	にぶい理	理	凸刻	直口	2.3	太めの凸割目厚手				8				
A-1 067	壺	広		口縁部	良 配質	明赤褐色	明赤褐色	凸刻	外反	2.7	太目の凸割目厚手				10	7			
A-1 068	鉢	窪		口縁部	良 砂質	暗褐色	褐色	凸刻	外反	3.4	太めの凸割目厚手/口唇部はくの字	形成/口唇部へラ形成/二叉達点文			18	9			
A-1 069	鉢	深		口縁部	良 砂質	暗褐色	明赤褐色	無文	直口		輪縁み跡あり				不	6			
A-1 070	壺	広		口縁部	良 配質	暗褐色	褐色	無文	直口		輪縁み跡あり				16	5			
A-1 071	鉢			口縁部	良 砂質	暗褐色	明赤褐色	無文	外反		輪縁み跡あり				不	5			
A-1 072	鉢			口縁部	良 砂質	暗褐色	褐色	無文						不	4				
A-1 073	壺	広		口縁部	良 配質	黃褐色	にぶい理	無文	やや外反		はけ目あり/輪縁み跡あり				不	4			
A-1 078	鉢			口縁部	良 配質	褐色	明褐色	沈	直口		輪縁み跡あり/口唇部に輪縁みで丸みを持たせている/粘土帶痕あり				不	4			
A-1 079	鉢	木		口縁部	良 砂質	褐色	暗褐色	沈	直口		口唇部に輪縁みで丸みを持たせている				不	10			
A-1 080	鉢			口縁部	良 砂質	明赤褐色	明赤褐色	沈	外反						3				
A-1 081	鉢	不		口縁部	良 配質	褐色	明赤褐色	沈	やや外反						不	8			
A-1 085	鉢			口縁部	良 砂質	褐色	褐色	凸刻	直口	1.6	補修孔あり				不	5			
A-1 086	鉢			口縁部	良 砂質	褐色	褐色	凸刻	直口	1.6					不	4			
A-1 087	鉢			口縁部	良 砂質	暗褐色	褐色	凸刻	直口	1.7					不	4			
A-1 088	鉢			口縁部	良 配質	暗褐色	にぶい黄褐色	凸刻	やや外反	1.7	小型				11	4			
A-1 091	壺	広		口縁部	良 配質	褐色	褐色	特異	外反	1.8	C3-44と同一				不	5			
A-1 092	その他				良 配質	にぶい赤褐色					取手か?								
A-1 156	鉢			口縁部	良 砂質	褐色	褐色	沈	やや外反										
A-1 161	壺			口縁部	良 砂質	灰褐色	褐色	沈	特異										
A-2 001 I				底部	良 砂質	褐色	明褐色	沈	やや外反							5.2	9		
A-2 002				底部	良 砂質	褐色	明褐色	A-II			木葉痕あり					5.6	9		
A-2 003 IV	鉢			底部	良 砂質	褐色	褐色	A-II			木葉痕あり/指頭圧痕あり					4.8	6		
A-2 004 IV				底部	良 砂質	褐色	褐色	A-II								2.4	不		
A-2 006 I	壺			底部	良 砂質	灰褐色	灰褐色	A-II			木葉痕あり/指頭圧痕あり					不	小		
A-2 008				底部	良 砂質	灰褐色	褐色	A-I			木葉痕あり					不	4		
A-2 009				底部	良 砂質	灰褐色	褐色	A-I			木葉痕あり					5	5		
A-2 010 I	壺			底部	良 砂質	褐色	褐色	B-III								不	不		
A-2 011 I	壺			底部	良 砂質	灰褐色	灰褐色	B-III			木葉痕あり					不	6		

第11表 出出土器分類1

形	縹	区	種別	鉢分類	名称	遺傳名	焼成	胎土	色調 表	色調 裏	タイプ	口縁タイプ	頸部	備考	口径	口厚	底径	底厚
A-2	012	面			底部		良	配質	明赤褐色	明赤褐色	B-II			木葉痕あり			不	6
A-2	015		鉢		口縁直下		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	特異	不				不	4	
A-2	023	IV	鉢		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	沈	やや外反				不	6	
A-2	024	II	不明		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	沈	直口				不	4	
A-2	025		鉢		口縁部		良	砂質	にぶい橙	にぶい橙	特異			頸部は外反/口縁部は直口		不	8.5	
A-2	027	II	面		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	特異	外反		口縁に刻目あり		不	4	
A-2	029	IV	鉢		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	特異	やや外反		足上連点凸		不	6	
A-2	030	IV	鉢		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	特異	外反		口縁に刻目あり/沈		不	6	
A-2	031		甕		口縁部		やや良	砂質	明赤褐色	赤褐色	特異	やや外反		凸削丸		不	8	
A-2	032	I	面	広	口縁部		良	砂質	明赤褐色	暗褐色	白刻	外反				不	4	
A-2	033	III	鉢		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	白刻	やや外反				不	6.5	
A-2	034		不明		口縁部		良	砂質	明赤褐色	暗褐色	不明	やや外反				不	6	
A-2	036		面		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	沈	やや外反				不	5	
A-2	039	I	鉢		口縁部		良	配質	明赤褐色	明赤褐色	無文	やや外反		裏にはけ目多少あり		不	5	
A-2	041	II	鉢		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	無文	やや外反		裏にはけ目多少あり		不	6	
A-3	001				底部		やや良	砂質	明赤褐色	赤褐色	C			木葉痕あり/指頭圧痕あり		6	9	
A-3	002				底部			砂質	明赤褐色	暗褐色	A-I			指頭圧痕あり		8	不	
A-3	003				底部	包上	良	砂質	にじい赤褐色	明赤褐色	A-I			木葉痕あり		不	6	
A-3	004				底部		良	砂質	にぶい橙	橙	A-II			木葉痕あり		8	9	
A-3	005				底部		やや良	砂質	赤褐色	赤褐色	A-II					不	10	
A-3	006	面			底部		良	配質	明赤褐色	にぶい橙	B-III			木葉痕あり/指頭圧痕あり		10	不	
A-3	007	面			底部		良	配質	明赤褐色	にぶい赤褐色	B-III			木葉痕あり		4	不	
A-3	008		口縁部下				砂質	にじい赤褐色	にじい赤褐色	沈	やや外反							
A-3	009		鉢		口縁直下		良	砂質	にぶい赤褐色	明赤褐色	白刻	不				不	不	
A-3	012		鉢		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	白刻	外反	1.9	凸削薄		不	5	
A-3	013		鉢		口縁部		やや良	砂質	橙	橙	凸刻沈	直口	2.8			不	6	
A-3	015		鉢		口縁部		良	砂質	橙	橙	特異	やや外反	2.5	指頭圧痕あり/凸削込点文/往口四角		不	4	
A-3	016	III	鉢		口縁部		良	砂質	暗赤褐色	にぶい褐色	沈	直口		指頭圧痕あり		不	7	
A-3	018		鉢		口縁部		良	砂質	暗赤褐色	にぶい赤褐色	無文	やや外反		指頭圧痕あり		不	5	
A-3	019		鉢		口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	特異	直口	不	口唇部に刻目/凸帶あり		不	4	
A-3	020	面			口縁部		良	泥質	にじい黃褐色	にぶい黃褐色	特異	直口	0.8				3	
A-4	001	I			底部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	A-II			木葉痕あり/指頭痕あり		10	9	
A-4	002	II			底部		良	砂質	暗褐色	暗褐色	A-II			木葉痕あり/指頭痕あり		6	9	
A-4	006	II	鉢		口縁直下		良	砂質	橙褐色	橙褐色	凸刻	不	不			不	不	
A-4	008	I			口縁直下		良	砂質	暗褐色	暗褐色	凸刻沈	不	不			不	不	
A-4	013	II	鉢		口縁部		良	砂質	暗褐色	暗褐色	特異	直口		たてに凸つき		不	不	
A-4	014	IV	鉢		口縁部		良	砂質	赤褐色	赤褐色	特異	直口		口唇部に刻文突文		不	7	
A-4	016	I	鉢		口縁部		良	砂質	赤褐色	赤褐色	特異	外反	不			不	5	
A-4	017	I	鉢		口縁部		良	砂質	暗褐色	暗褐色	特異	外反	不	口唇部に刻文突文		不	6	
A-4	032	I			口縁直下		良	砂質	褐色	褐色	沈	やや外反				不	不	
A-4	033	I			口縁直下		良	砂質	暗褐色	暗褐色	沈	不				不	不	
B-1	006				底部		良	配質	暗赤褐色	暗赤褐色	A-II			木葉痕あり		7	9	
B-1	017				脣部		良	配質	赤褐色	暗赤褐色				はけ目あり/輪積み跡あり				
B-1	018		鉢	深	口縁直下		良	泥質	暗褐色	暗赤褐色	凸刻					不	不	
B-1	027		鉢	深	口縁部		良	砂質	暗褐色	暗褐色	凸刻	外反				不	7	
B-1	032				口縁部		良	砂質	明褐色	明褐色	凸刻	直口		厚手		不	6	
B-1	033		面		口縁部		良	配質	灰赤褐色	赤褐色	沈	直口		輪積み跡あり		不	5	
B-1	035		鉢		口縁部		良	砂質	灰赤褐色	赤褐色	特異	やや外反		沈線/口唇部刻目		不	6	
B-1	040		鉢		口縁部		良	配質	暗褐色	暗褐色	無文	外反				不	4	
B-1	048		鉢		口縁部		良	砂質	灰褐色	にぶい橙	特異	直口		口唇部刻文突文/沈線あり		不	6	
B-1	053				外來	包上	良	配質	暗赤褐色	暗赤褐色				外來 須恵器内側はけ目あり				
B-2	001				底部		良	配質	橙	橙	A-II			木葉痕あり/指頭圧痕あり		9	7	
B-2	012	面			口縁部		良	配質	明褐色	暗褐色	無文	やや外反				不	5.5	
B-2	014		鉢		口縁部		良	砂質	灰褐色	暗褐色	沈	やや外反		胎上色調が他の在来のものと異なる		不	7	
B-3	002	IV			底部		良	砂質	明赤褐色	明褐色	B-III			木葉痕あり		6	14	
B-3	004				底部		良	砂質	暗褐色	暗褐色	A-II			木葉痕あり/指頭圧痕あり		8	8	
B-3	019		鉢	浅	口縁部		良	砂質	暗褐色	赤褐色	沈	やや外反				不	7	

第11表 出土土器分類2

カテゴリ	翻訳	区	種別	鉢分類	名称	遺構名	焼成	始土	色調	表	色調	裏	タイプ	口縁タイプ	頭部	備考	口径	厚	底径	底厚
B-3	021	鉢		口縁部			良	砂質	褐色	褐色	沈	直口				不	6			
B-3	022	盞		口縁部			良	泥質	明黃褐色	明黃褐色	特異	外反			口唇部に刺突文	15	6			
B-3	024	IV	盞	口縁部			良	泥質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	特異	外反			注口土器	不	3			
B-3	025	IV	盞	口縁部			良	泥質	明黃褐色	明黃褐色	凸刻	や内反				不	5			
B-3	027	鉢		口縁部			良	砂質	灰黃褐色	灰黃褐色	無文	外反				不	6			
B-3	028	IV	鉢	口縁部			良	砂質	暗褐色	明黃褐色	無文	や外反			表裏にはけ目あり	不	8			
B-3	030	III	鉢	口縁部			良	泥質	暗褐色	暗褐色	無文	内反			指圧痕あり	不	5			
B-4	003			底部			良	泥質	褐	にぶい赤褐色	A-II				木葉痕あり					
B-4	006			底部			良	泥質	橙	明赤褐色	B-II					不	10			
B-4	009	IV	盞	口縁直下			良	泥質	にぶい橙	灰褐色	凸刻	や外反			木葉痕あり/指圧痕あり/け目あり		8	6		
B-4	011	盞		口縁直下			良	泥質	橙	橙	凸刻	や内反			輪縁み跡あり	不	6.5			
B-4	013	鉢		口縁直下			良	砂質	明赤褐色	橙	凸刻	や外反			はけ目あり	不	6			
B-4	014	IV	鉢	口縁直下			良	砂質	にぶい赤褐色	橙	凸刻	や外反				不	6			
B-4	015	I	鉢	浅	口縁直下		良	砂質	明赤褐色	赤褐色	沈	不			輪縁み跡あり	不	6			
B-4	016	I	鉢	口縁直下			良	砂質	暗赤褐色	赤褐色	沈	不				不	10			
B-4	018	II	盞	口縁直下			良	砂質	橙	特異	不									
B-4	021	IV	鉢	口縁直下			良	砂質	橙	明赤褐色	沈	不				不	6			
B-4	022	盞		口縁直下			良	砂質			特異				輪縁み跡あり					
B-4	024	I	盞	口縁部			良	泥質	暗赤褐色	暗赤褐色	特異	や外反	1.0	凸凹		不	3			
B-4	025	II	鉢	口縁部			良	砂質	暗赤褐色	橙	無文				や外反	不	6			
B-4	027	鉢	甕	口縁部			良	砂質	明褐色	明褐色	無文	直口				不	5			
B-4	028	鉢	甕	口縁部			良	砂質	明褐色	赤褐色	特異	直口			はけ目あり/29、30、31と同一固体か?	不	5			
B-4	029	IV	鉢	甕			良	砂質	にぶい赤褐色	赤褐色	特異	直口	28、30、31	と同一固体か?		不	6			
B-4	030	鉢	甕	口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	赤褐色	特異	直口			はけ目あり/28、29、30と同一固体か?	不	6			
B-4	031	IV	鉢	口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	赤褐色	特異	直口			はけ目あり/28、29、30と同一固体か?	不	6			
B-4	033	鉢		口縁部			良	砂質		明褐色	凸刻	や外反	2.7	はけ目あり			不	6		
B-4	034	鉢		口縁部			良	砂質	黑褐色	明褐色	凸刻沈	や外反	2.4			不	5			
B-4	036	鉢	浅	口縁部			良	泥質	赤褐色	赤褐色	無文	内反				不	3			
B-4	047	鉢	甕	口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	特異	くの字			割面口縁近くに5mm程の穴を有する(補修孔)	33	6			
B-4	076	盞		口縁部			良	泥質	橙	特異	不					不	5			
B-5	001			底部			良	砂質	赤褐色	赤褐色	A-II				木葉痕あり/指圧痕あり		8.2	7		
B-5	002			底部			良	砂質	橙	にぶい赤褐色	A-II				木葉痕あり/指圧痕あり		8	10		
B-5	003	II		底部			良	砂質	赤褐色	暗褐色	赤褐色	A-I			木葉痕あり		8	8		
B-5	008	II		底部			良	泥質	にぶい赤褐色	橙	B-III				木葉痕あり/指圧痕あり		7.2	8		
B-5	010	鉢	甕	口縁直下			良	泥質	暗赤褐色	明赤褐色	特異	不				不	不			
B-5	012	II	盞	口縁直下			良	泥質	橙	灰褐色	凸刻	不			輪縁み跡あり	不	不			
B-5	015	II	鉢	甕	口縁部		良	泥質	橙	にぶい赤褐色	凸刻次	や外反	3.3			不	8			
B-5	016	I	鉢	口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	黒褐色	凸刻沈	や外反	0.3			不	5			
B-5	017	鉢	深	口縁部			良	泥質	橙	明赤褐色	無文	直口			表裏にはけ目ありC-2~3号-器物の可能性あり	12	4			
B-5	018	鉢	甕	口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	明赤褐色	無文	直口			はけ目あり/輪縁み跡あり	17	5			
B-5	019	I	鉢	口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	橙	無文	や外反				不	4			
B-5	020	鉢		口縁部			やや良	泥質	橙	明赤褐色	無文	直口				不	3			
B-5	023	鉢		口縁部			良	砂質	赤褐色	明赤褐色	特異	外反			輪縁み跡あり/口唇部に削目	7				
B-5	034	鉢	深	口縁部			良	泥質	明赤褐色	灰赤褐色	特異	外反	3.6		裏にはけ目あり/輪縁み跡あり/凸刻/二叉遺迹点	4				
B-5	025	Ⅳ	盞	口縁部			良	泥質	明赤褐色	黒褐色	特異	や外反	1.2			9.5	4			
B-5	048	盞		口縁部			良	泥質	橙	凸刻	直口				19	4				
C-1	004			底部			良	泥質	灰褐色	にぶい赤褐色	A-II				木葉痕あり/指圧痕あり		6	7		
C-1	005			底部			良	砂質	赤褐色	赤褐色	A-II				木葉痕あり		8	6		
C-1	011	盞		底部			良	泥質	明赤褐色	明赤褐色	B-III						4.5	9		
C-1	034	盞		口縁直下	ヤコウガ		良	泥質	にぶい赤褐色	橙	凸刻	不		33と同一固体と思われる		不	不			
C-1	040	鉢	浅	口縁部			良	泥質	にぶい赤褐色	同赤褐色	凸刻沈	や外反	2.0			不	4			
C-1	042	鉢		口縁部			良	砂質	赤褐色	赤褐色	凸	直口	不		表にはけ目あり/輪縁み跡あり凸	不	5			
C-1	043	鉢		口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	特異	や外反			口唇部削目痕/はけ目あり	不	6			
C-1	048	盞		口縁部			良	泥質	橙	橙	凸刻	外反	2.0			不	3			
C-1	049	鉢	不	口縁部			良	泥質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	凸	直口	不		はけ目あり/輪縁み跡あり	不	7			
C-1	050	盞		口縁部			良	泥質	にぶい赤褐色	同赤褐色	凸	直口	2.0	指圧痕あり/輪縁み跡あり	9.8	5				
C-1	064	鉢	甕	口縁部			良	砂質	灰褐色	赤褐色	無文	や外反			はけ目あり/輪縁み跡あり	不	4			

第11表 出土土器分類3

列番	器種	区	種別	鉢分類	名称	遺構名	焼成	胎土	色調	表	色調	裏	タイプ	口縁タイプ	類部	備考	口径	口厚	底径	底厚	
C-1	102	盃		口縁部		良	泥質	黃褐色	稚	無文	やや外反					不	5				
C-1	109	盃		底部			泥質	にぶい褐色		C											
C-2	021		外来			良	砂質	椎	にぶい稚						底部直上				5 7		
C-2	037	盃	口縁直下			良	泥質	にぶい椎	稚	不明					外反						
C-2	044	鉢	口縁部			良	砂質	暗赤褐色	赤褐色	凸刻	やや外反	2.1			輪縁み跡あり/取手付	不	不	5			
C-2	047	鉢	口縁部			良	泥質	にぶい椎	にぶい稚	内削	直口	2.0			はけ目あり輪縁み跡あり。46、48と同一の文様あり。同一個体と思われる。	不	5				
C-2	061	盃	広	口縁部		良	泥質	にぶい椎	にぶい稚	無文	外反					不	5.5				
C-2	062	盃	広	口縁部		良	砂質	明赤褐色	稚	無文	やや外反				輪縁み跡あり	不	4				
C-2	069	盃	広	口縁部		良	泥質	にぶい赤褐色	赤褐色	沈	やや外反				輪縁み跡あり/内側に指痕圧痕あり/輪縁み跡あり	15.4	5				
C-2	062	盃	口縁部			良	泥質	椎		凸刻	直口				輪縁み跡あり	7.4	6				
C-2	063	盃	口縁部			良	泥質	椎		凸刻	強外反	2.4				6	6				
C-2	064	I	鉢	口縁部		良	泥質	灰褐色	沈	外反					口縁が大きさがお状に広がっている	不	6				
C-2	065	鉢	口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	明赤褐色	沈	やや外反				沈痕あり	不	4.5				
C-2	067	鉢	口縁部			良	砂質	にぶい椎	明赤褐色	凸刻沈	やや外反				裏にはけ目あり	不	5				
C-2	089	II-I	その他	口縁部		良	泥質	椎		稚					土製品3つの中を有す/土器の二次利用用途不明						
C-3	002		底部			良	泥質	にぶい椎	稚	C					木彫痕あり/指痕圧痕あり	12	8				
C-3	003		底部			良	砂質	にぶい褐色	明赤褐色	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり	8	13				
C-3	006	I	底部			良	砂質	椎		稚	A-II				木彫痕あり/指痕圧痕あり	19	不				
C-3	009	盃	広	口縁直下		良	泥質	椎	明赤褐色	凸	やや外反				小型	不	4				
C-3	011	鉢	口縁直下			良	砂質	にぶい赤褐色	灰褐色	凸刻沈	不				輪縁み跡あり	8					
C-3	012	鉢	口縁直下			良	砂質	赤褐色	赤褐色	凸刻沈	不					不	4				
C-3	015		外来			良	砂質	灰褐色	灰褐色						外來土器/凸刻/指痕圧痕あり/はけ目あり						
C-3	025	鉢	口縁部			良	砂質	灰褐色	稚	凸刻沈	やや外反	3.3			はけ目あり/輪縁み跡あり	不	7.5				
C-3	027	II	鉢	口縁部		良	砂質	にぶい椎	にぶい椎	直口	2.6				指痕圧痕あり	不	5				
C-3	028	鉢	深	口縁部		良	砂質	灰褐色	明赤褐色	凸	やや外反	1.9			指痕圧痕あり/輪縁み跡あり	12	6				
C-3	029	鉢	口縁部			良	砂質	灰褐色	明赤褐色	無文					指痕圧痕あり/輪縁み跡あり	不	5				
C-3	031	鉢	口縁部			良	砂質	黒褐色	にぶい褐色	無文	やや外反	1.4			指痕圧痕あり/輪縁み跡あり	不	5				
C-3	032	鉢	口縁部			良	砂質	椎		無文	直口				はけ目あり	不	5				
C-3	033	鉢	中口	口縁部		良	砂質	赤褐色	赤褐色	特異	外反				口縫刻目あり						
C-3	064	鉢	深	口縁部		良	砂質			無文	直口				指痕圧痕あり/はけ目あり/輪縁み跡あり	18	6				
C-4	001		底部			良	砂質	椎	明赤褐色	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり	7	8				
C-4	002		底部			良	砂質	にぶい椎	にぶい椎	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり	6	7				
C-4	003		底部			良	砂質	灰褐色	灰褐色	C					木彫痕あり/指痕圧痕あり	7	6				
C-4	014	I	鉢	深	口縁部	良	砂質	黒褐色	にぶい椎	凸刻	やや外反	2.4			輪縁み跡あり	12	7				
C-4	020	N	その他	口縁部		良	砂質	明赤褐色	稚				2.9		舌状土器製品用途は不明						
C-4	040		底部			良	砂質	赤褐色	赤褐色	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり	8.6	17				
C-4	042	鉢	口縁部			良	砂質	暗赤褐色	赤褐色	特異	直口				指痕圧痕あり/指痕圧痕あり	不	4				
D-1	001		底部			良	泥質	黒褐色	稚	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり	6.4	6.5				
D-1	005		底部			良	砂質	赤褐色	明赤褐色	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり	5.8	16				
D-1	006		底部			良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり	6.4	12				
D-1	007		底部			良	砂質	にぶい赤褐色	灰褐色	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり	11					
D-1	010	盃	底部			良	泥質	椎	にぶい椎	B-III					木彫痕あり/指痕圧痕あり/内側にはけ目あり/裏に器面調整痕を有する	9	不				
D-1	016		底部			良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	D					脚台			6	9		
D-1	018		胴部			良	泥質	にぶい椎	稚						特異裏にたたき痕あり						
D-1	037	鉢	口縁部			良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	凸刻	やや外反				二叉連点文/口縫部へラ形成	不	8				
D-1	042	盃	広	口縁部		良	泥質	にぶい椎	にぶい赤褐色	無文	やや外反	3.0				13.6	4				
D-1	044	盃	口縁部			良	砂質	にぶい椎	にぶい椎	特異	直口				方彌又は匂口/指痕圧痕あり/輪縁み跡あり	不	5				
D-1	045	鉢	深	口縁部		良	砂質	にぶい椎	にぶい椎	特異	直口	3.5			指痕圧痕あり/内側にはけ目あり	14.5	5				
D-1	046	盃	口縁部			良	泥質	泥質	泥質	特異	直口	2.5			範凸帯指痕圧痕あり	12	5				
D-1	047	鉢	口縁部			良	砂質	にぶい椎	にぶい椎	特異	外反	2.5			凸刻目沈線	不	5				
D-1	048	鉢	口縁部			良	砂質	にぶい赤褐色	赤褐色	特異	やや外反				口縫刻目	不	6				
D-1	051	鉢	包上	口縁部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	特異	直口	凸口センス式				不	7				
D-1	104	鉢	深	口縁部		良	砂質	にぶい椎	にぶい椎	凸刻沈	やや外反	4.0			器面調整痕を有する指痕圧痕あり/輪縁み跡あり	20	5				
D-2	002		底部			良	泥質	明赤褐色	にぶい褐色	A-I					木彫痕あり/指痕圧痕あり			7	8		
D-2	006		底部			良	砂質	暗褐色	にぶい赤褐色	A-II					木彫痕あり/指痕圧痕あり			12	21		

第11表 出土土器分類4

列番	種類	区	種別	鉢分類	名称	漁穫名	焼成	胎土	色調 表	色調 裏	タイプ	口縁タイプ	頸部	備考	口径	口厚	底径	底厚	
D-2	007				底部		良	砂質	暗赤褐色	暗赤褐色	A-II			木葉痕あり/指頭圧痕あり			7	7	
D-2	010				その他		良	配質	橙	橙				C-3の遺物と結合土器品二次加工と思われる					
D-2	017			鉢	口縁部		良	配質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	凸	やや外反		はけ目跡あり	不	6			
D-2	027		底	広	口縁部		良	配質	灰褐色	灰褐色	無文	直口			11.7	5			
D-2	028		鉢	深	口縁部		良	砂質	にぶい赤褐色	赤褐色	無文	外反			21	4			
D-2	029	Ⅲ	鉢	深	口縁部		良	砂質	黒褐色	暗赤褐色	無文	直口		小型指頭圧痕あり輪積み跡あり	7	5			
D-2	030		鉢		口縁部		良	砂質	にぶい赤褐色	赤褐色	沈	やや外反		内側に沈線を有する	不	5			
D-2	036		壺	包上	良	泥質	にぶい褐色	橙	沈	直口				不	4				
D-2	037		鉢	壺	口縁部	包上	良	泥質	橙	にぶい橙	特異	直口	1.6	片口?取っ手跡を有する	不	6			
D-2	039		鉢		口縁部		良	泥質	にぶい褐色	無文	直口	1.6		不	5				
D-2	040		鉢	甕	口縁部		良	砂質	暗褐色	暗褐色	特異	外反			不	7			
D-2	080		外東	包上	良	泥質	灰黃褐色	にぶい黃褐色	無文	無文				表面にはけ目あり/口縁直下長石砂粒を含む					
D-2	105	Ⅲ	甕	口縁部		良	泥質	橙	にぶい黄褐色	無文	やや外反			指頭圧痕あり輪積み跡あり115と同じ腹か?	不	6			
D-2	115	Ⅲ	甕	口縁部		良	泥質	にぶい黄褐色	無文	特異	不			7					
D-3	001			底部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	A-I			C3の遺物と結合木葉痕あり/指頭圧痕あり		6.8	8			
D-3	002			底部		良	泥質	にぶい褐色	にぶい褐色	A-I			木葉痕あり/指頭圧痕あり			5			
D-3	003		底	底部		良	砂質	にぶい褐色	無文	D			内側にはけ目あり/輪積み跡あり						
D-3	004			底部		良	砂質	橙	明赤褐色	D			内側にはけ目あり/輪積み跡あり底部丸底			9			
D-3	008		壺	胴部		良	泥質	橙	橙				沈線あり/輪積み跡あり						
D-3	011		鉢	甕	口縁部		良	泥質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	凸沿	直口	2.7		不	7			
D-3	013	Ⅲ	鉢	口縁部		良	砂質	にぶい赤褐色	橙	凸沿	やや外反			不	4				
D-3	014	Ⅲ	鉢	深	口縁部		良	砂質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	凸沿	やや外反	3.1	内側にはけ目あり	18	8			
D-3	017	Ⅲ	鉢	口縁部		良	砂質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	無文	やや外反		1.8と同一固体	不	7				
D-3	018		鉢	口縁部		良	砂質	にぶい赤褐色	赤褐色	無文	外反		1.7と同一固体	不	7				
D-3	019		鉢	深	口縁部		良	砂質	暗褐色	暗褐色	無文	やや外反			16.4	5			
D-3	021		鉢	口縁部		良	砂質	にぶい橙	にぶい橙	凸沿	外反	3.5	表に壓	不	8				
D-3	035	Ⅲ		底部		良	泥質	明赤褐色	明赤褐色	A-I			3.5木葉痕あり/指頭圧痕あり		7	4			
D-3	044			底部		良	砂質	明赤褐色	明赤褐色	A-II			木葉痕あり/指頭圧痕あり		6.6	7			
D-3	045	Ⅲ	直	底部		良	砂質	にぶい橙	無文	B-III			木葉痕あり	不	不				
D-4	001	Ⅲ		底部		良	泥質	にぶい赤褐色	明赤褐色	A-I			木葉痕あり		9	5			
D-4	006	VII		底部		良	泥質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	A-II			木葉痕あり/指頭圧痕あり		6	7			
E-1	001			底部		良	配質	にぶい赤褐色	橙	A-I			木葉痕あり/指頭圧痕あり		6	8			
E-1	005			底部		良	砂質	明褐色	明褐色	A-II			木葉痕あり/指頭圧痕あり		7.8	12			
E-1	008			底部		良	配質	橙	橙	B-III			木葉痕あり/指頭圧痕あり		6	6			
E-1	013		鉢	口縁直下		良	砂質	橙	橙	特異	やや外反								
E-1	015		鉢	口縁部		良	砂質	にぶい赤褐色	明赤褐色	特異				不	5				
E-1	017		鉢	深	口縁部		良	砂質	灰褐色	にぶい赤褐色	凸沿	やや外反	2.4		不	5			
E-1	018		鉢	口縁部		良	砂質	暗赤褐色	明褐色	凸沿	やや外反	2.6		不	5				
E-1	019		鉢	口縁部		良	砂質	暗褐色	暗褐色	凸沿	やや外反	2.0	輪積み跡あり	不	7				
E-1	023		鉢	口縁部		良	砂質	黑褐色	にぶい橙	無文	外反			不	4				
E-1	025		鉢	甕	口縁部	ウニベルト	良	砂質	褐色	にぶい橙	無文	直口			不	7			
E-1	026		鉢	口縁部		良	泥質	暗褐色	褐色	無文	外反			不	5				
E-2	001			底部	カクラン	良	砂質	赤褐色	にぶい黄褐色				木葉痕あり/指頭圧痕ありA-II		7	7			
E-2	004		鉢	甕	口縁部		良	泥質	暗褐色	暗褐色	凸沿沈	外反	3.4		23.2	1			
ペクト	003		鉢	甕	口縁部	ウニベルト	良	砂質	暗赤褐色	暗赤褐色	無文	外反		はけ目あり	不	7			

第11表 出土土器分類 5

第V章 自然遺物

第1節 植物遺存体

安良川遺跡出土の植物遺体

札幌大学 高宮 広士

1) 遺跡の概要

- | | |
|-----------|----------------------------------|
| a : 遺跡の所在 | 鹿児島県大島郡笠利町 |
| b : 遺跡の名称 | 安良川（アラゴー）遺跡 |
| c : 調査の機関 | 笠利町教育委員会 |
| d : 発掘期間 | 平成 15 年 4 月 26 日～平成 15 年 5 月 4 日 |
| e : 文化 | |

2) バックグラウンド

琉球列島における農耕社会の形成過程を理解することを目的の一つとし、安良川遺跡における発掘調査が笠利町教育委員会および熊本大学文学部考古学研究室によって実施された。笠利町／奄美大島においては、以下のような植物利用が明らかになっている。用見崎遺跡（ようみさき：6～8世紀）において植物遺体を検出するために土壌をサンプリングし、フローテーション処理した。サンプル量は少なかったが、出土した植物遺体は野生種のみであった（高宮 1997）。さらに、グスク時代に属する赤木名グスク（あかぎな：12～13世紀）より約6リットルの土壤サンプルを同様に処理した結果、サンプル量の割には多量の植物遺体を回収した。そのほとんどがイネであった（高宮 2003）。このような結果により、奄美諸島では6～8世紀から12～13世紀にかけて農耕が導入されたと考えられ、安良川遺跡における調査は、この仮説を検証する絶好の機会と思われた。

3) 扱った資料

今回の土壌のサンプリングは、1) 植物利用の復元と2) 根成孔隙の検証を目的として行った。前者のために、ウニ溜まり土坑、A-1サンプル、A-3（Ⅲ区）およびD1・E1間、後者のためにA-1壁面より土壌をコラムサンプリングした。土壌サンプル量はそれぞれウニ溜まり（158.5l）、D1・E1間（16l）、A-1サンプル（129.5l）、A-3（Ⅲ区）（38l）、およびコラムサンプル（81l）の計423リットルであった。回収された浮遊物は、計581.26グラムと今日までフローテーションを実施した遺跡の中では多い方であるが、それは、軽石がかなり含まれていたからである（表1）。

4) 検出された炭化植物遺体

検出された炭化植物遺体は保存状態が悪く、全て小破片であった。そのうち、今日までの経

験からタブノキあるいは堅果類の子葉および堅果皮と思われるものが確認できた。その結果、タブノキあるいは堅果類子葉？69片、堅果皮？58片、および同定不可能189片の計318片の植物遺体を検出した（表1）。

a) ウニ溜まり土坑

計90片の植物遺体が回収され、そのうち60片は同定不可能であった。計19片は堅果皮？と思われる。また、タブノキあるいは堅果類の子葉？と思われる破片が11片回収された。

b) D1・E1間

計24片の植物遺体が回収され、そのうち19片が同定不可能、堅果皮？と思われるもの1片およびタブノキあるいは堅果類子葉？と思われるものが4片回収された。

c) A-1サンプル

タブノキあるいは堅果類子葉？と思われる破片22片、堅果皮？27片、および同定不可能46片の計95片の植物遺体が回収された。

d) A-3(Ⅲ区)サンプル

計61片の植物遺体が回収され、タブノキあるいは堅果類子葉？とされるもの20片、堅果皮？7片、および同定不可能34片であった。タブノキあるいは堅果類子葉？のうち1片は比較的の保存状態がよく堅果類子葉と思われる。

e) コラムサンプル

12片のタブノキあるいは堅果類子葉？、4片の堅果皮？および32片の同定が不可能な植物遺体片が回収された、計48片である。

5) 考察および結論

回収された植物遺体の保存状態が悪く、種あるいは属のレベルで確実に同定することの可能な植物遺体は含まれていなかった。遺跡自体も中心部が消失しており、今回回収された植物遺体をもとに遺跡の機能について考察することは不可能である。また、植物遺体の分布状況にもサンプル間でそれほど強い偏りがあるようでもない（表2）。今回の植物遺体分析により結論として言えることは、以下の点であろう。

まず、用見崎遺跡におけるフローテーション処理結果も考慮すると、奄美大島の弥生～平安並行期遺跡から植物遺体を回収することは、可能ということであろう（保存状態はあまり期待できないかも知れないが）。つまり、フローテーション法を導入することにより、奄美大島先史・原史時代における植物利用を理解することは可能であろう。

次に、用見崎遺跡および赤木名グスクにおける植物遺体の分析結果により、（まだまだサンプルは必要であるが）笠利町における農耕の始まりは、5～8世紀と12～13世紀の間に絞り込まれたと思われる。奄美諸島においては、サウチ遺跡における発掘調査により、弥生文化の波及が確認され、さらに水田耕作の伝播が遺跡の立地より示唆されている（河口 1978）。しかしながら、イネ等の栽培植物遺体あるいは水田遺構等、水田耕作の存在を支持するデータは得られていない。今回の分析結果は、サウチ遺跡の時期に水田耕作が伝播していなかったか、たとえ伝播していたとしても、安良川遺跡（および用見崎遺跡）の時期には消滅したことを示

喰するのではないであろうか。さらに、たとえサウチ遺跡の時期に水田耕作が存在したとしても、この農耕システムは、グスク時代のシステムとは同系統のものではないようである。

最後に根成孔隙についてであるが、今回の分析結果からは明確なことは言えないが、IおよびII層から野生植物遺体が検出されたのは、ある程度の搅乱があったのかを示すものと思われる。

謝辞

安良川遺跡より土壌サンプルの回収およびそれらをフローテーション処理するという機会を与えて下さった笠利町教育委員会中山清美氏および熊本大学木下尚子教授に感謝申し上げます。

参考文献

河口貞徳

1978 『サウチ遺跡』

高宮広士

1997 「用見崎遺跡（奄美大島大島郡笠利町）におけるフローテーション法の導入とその成果について」『考古学研究報告書第33集』熊本大学文学部考古学研究室（編）pp.46-48. 熊本大学文学部考古学研究室：熊本市

2003 「赤木名グスク出土の植物遺体（速報）」『赤木名グスク遺跡』笠利町教育委員会（編）pp.66-69. 笠利町教育委員会：笠利町

表1. 安良川遺跡出土の植物遺体

サンプル地点	FL No.	サンプル量 (I)	浮遊物量 (I)	ナツツ子葉/タブノキ? (片)	堅果皮 (片) ?	UNI (片)	計 (片)
ウニ溜まり土坑陸側 (北)	10	8.5	9.56		1	1	2
	15	14.0	13.01			2	2
	16	11.0	11.91			4	4
	19	12.0			1		1
	22	10.0	9.42	1	2	3	6
	24	10.0	14.14		4	2	6
	26	11.5	11.15		1		1
ウニ溜まり土坑陸側 (南)	6	11.0	14.78	3		2	5
	8	9.0	6.79		1		1
	9	13.5	14.23	1	2	10	13
	28	7.5	9.96			3	3
	36	8.0	8.20	1		15	16
	46	11.0	11.74	1	6	14	21
南: 下部しみ込み	4	10.0	4.0	2	1	1	4
	33	8.5	2.79	2		2	4
	42	3.0	2.41			1	1
小計		158.5	109.61	11	19	60	90
D 1・E 1間							
(上から 4 cm)	44	1.5	0.43				
(上から 4 cm)	40	2.0	0.90			2	2
(4 ~ 8 cm)	41	3.0	1.91	2		2	4
(8 ~ 12cm)	43	1.5	1.71			2	2
(12~16cm)	2	8.0	21.86	2	1	13	16
小計		16.0	26.81	4	1	19	24
A-1サンプル (上部)	12	11.0	55.35	1	2	7	10
	25	9.5	14.86	1		5	6
	27	8.0	20.38	1	2		3
	30	11.0	17.33	1	10	4	15
	31	10.0	24.44		1	4	5
	32	9.0	31.23	3	2	6	11
	1	12.5	7.58	2	2	3	7
A-1サンプル (下部)	7	12.0	16.42	3	5	4	12
	13	12.0	11.71	2		10	12
	20	9.5	9.12		1		1
	23	10.0	10.57	7		1	8
	39	5.0	4.55			1	1
	14	10.0	9.72	1	2	1	4
小計		129.5	233.26	22	27	46	95
A-3 (Ⅲ区)	18	10.5	16.72	2		9	11
	11	8.5	12.04	7	4	19	30
	29	11.0	12.53	6	3	2	11
	37	8.0	7.37	5		4	9
小計		38.0	48.66	20	7	34	61
コラムサンプル (A-1壁面)							
I層	45	10.0	25.45		2		2
	3	6.0	6.95			5	5
小計		16.0	32.40		2	5	7
II層	21	8.5	10.89		2		2
	17	14.5	26.20			10	10
	35	13.0	14.35	1		9	10
小計		36.0	51.44	1	2	19	22
III層	38	8.5	18.48	10		8	18
	34	13.5	46.79				0
小計		22.0	65.27	10		8	18
IV層	5	7.0	13.81	1			1

表2. 安良川遺跡出土の植物遺体サマリー

ウニ溜まり土坑陸側	サンプル量 (I)	浮遊物量 (I)	ナツツ子葉/タブノキ? (片)	堅果皮 (片) ?	UNI (片)	計 (片)
ウニ溜まり土坑陸側	158.5	109.61	11	19	60	90
D 1・E 1間	16.0	26.81	4	1	19	24
A-1サンプル	129.5	233.26	22	27	46	95
A-3 (Ⅲ区)	38.0	48.66	20	7	34	61
コラム	16.0	32.04			5	7
	36.0	51.44	1	2	19	22
	22.0	65.27	10	2	8	18
	7.0	13.81	1			1
コラム (計)	81.0	162.92	12	4	32	48
合計	423.0	581.26	69	58	191	318

第2節 貝類遺存体

用安良川遺跡から得られた貝類遺体（予報）

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

安良川（あらごー）遺跡は、奄美大島笠利町用の太平洋岸の海岸砂丘上に位置する古代相当期（兼久式土器の時期）の遺跡である。今回、この遺跡内のいくつかの地点で、土壤を採取し、貝類遺体について検討することができたので、淡水の影響のある堆積物の状況を含め、ここにその結果を述べる。

本遺跡の調査に際し、笠利町教育委員会の中山清美氏、熊本大学の木下尚子先生、伊仙町教育委員会の新里亮人氏および発掘参加者の方々には、発掘調査に際し、様々な御教示・御協力を頂いた。記してお礼申し上げる。

土壤採取地点と処理方法

今回は、本遺跡の遺物包含層（III層）とその上下の堆積層から、土壤を採取した。今回処理したのは、食用貝類の検討のために遺跡の北東側にウニ類の殻が集中して認められたウニ集中部の4/8cmのものと、微小貝類から環境を復元するために前記のウニ集中部4/8cmと、南西部のコラム3の上部（遺物包含層：III層）および北西部にのみレンズ状に認められた灰褐色混砂土層のII層から得られたもの（地点7）である。このII層は、発掘時に、その色彩等から、“灰層”ではないかと考えられた。しかし、コラム7の壁面に淡水産貝類が認められたので、その詳細を微小貝類から検討するために、上部の少し灰色がかった砂質の部分（サンプルNo. 1）と下部の青灰色の粘土質の部分（サンプルNo. 3）に分けて採取した。

これらの土壤は、60°Cで2日間以上乾燥させ、その体積と重量を測定した。その後、水中で9.5, 4, 2, 1 mmのメッシュで静かに洗浄・篩い、それぞれのメッシュに残ったものの中から、貝類遺体を抽出した。同時に、浮き上がったものは、細かなメッシュでくい取り（フローテーション法）、乾燥させた後に貝類遺体等を抽出した。

結果および考察

1) 食用貝類遺体の組成と特徴

今回のウニ集中部で得られた遺体の組成を、9.5mmメッシュ上のものと、9.5mmと4 mmのメッシュをあわせたものとして、最少推定個体数として表1に示した。同時期で同様な立地に存在する用見崎遺跡の調査結果から、食用貝類の組成は、4 mmメッシュまでで、ほぼ示されることが報告されており（黒住、1996）。今回もこのサンプルの食用貝類の組成は把握できていると考えられる。また、9.5mmメッシュのものは、現地調査で得られるピックアップ法（現場資料；ハンドピック）に対応しよう。

全体的な個体数は少ないものの、9.5 mmでは、マガキガイやイソハマグリ・ハナマルユキ・コウダカカラマツ・アマオブネが多く、4 mmまでになるとリュウキュウヒバリが最も多くな

り、イシダタミアマオブネも多数確認されるようになる。そして、食用の貝類としては、遺跡前面の海域ではイノーの発達が悪いことにも起因するであろうが、潮間帯と干瀬のものが多い傾向にある。このようなリュウキュウヒバリやマガキガイ・コウダカラマツが優占し、イノーのものが少ないことは、前述の用見崎遺跡の組成と類似する（黒住、1995）。つまり、貝類の採集・利用形態は、用安良川遺跡と用見崎遺跡で、大きな差異がなかった可能性が高い。

ただ、今回の発掘では、前述したウニ集中部が確認された。図1に示したように、メッシュに残ったもののほとんどがウニ類であった。このウニは、棘と骨板からナガウニ類（従来ナガウニとされてきたウニには複数種が含まれていることが近年の研究で明らかになっている。現時点においては、発掘されるものを詳細な種レベルで同定することは極めて困難であり、また種を認識することによって、当時の人々のウニ利用に対する種ごとの異なった側面を示せるわけではないと考えられるので、ここではナガウニ類とした）と同定された。奄美・沖縄で現在食用にされるウニは、棘が細短かいシラヒゲウニであり、ナガウニ類はほとんど食用とされない。そのため、今回のウニ集中部が食用後の廃棄によるものであるのか、食用以外の採集結果であるのかは不明であるが、少なくとも表1のように食用貝類も同じ場所に廃棄されたことは確実であろう。また、琉球列島の遺跡においても、時にシラヒゲウニ類やナガウニ類が土壌サンプルから確認されるが（黒住、1997, 2000）、大量に出土した報告はほとんどない。ただ、未報告ではあるが、沖縄諸島の貝塚時代前期の伊是名貝塚（伊是名貝塚学術調査団、2001）では、土壌を2 mmのメッシュで篩ったことにより、大量のシラヒゲウニ類が出土した例がある。このように琉球列島のウニ類の利用は、時代や地域で決まるわけではなく、むしろ「集団」ごとに異なると考えられる。今後、多くの遺跡でウニ類が検出されることを望みたい。なお、今回も1本だけであったが、パイプウニの棘が得られた。琉球列島の他の遺跡では、この棘を研磨した製品も認められている（例えば比嘉、1977）。生きているときのパイプウニは凹所に生息し、棘をつかえ棒のようにするため採集にくく、報告者のこれまでの土壌調査によっても、パイプウニの小さな棘（本種ではサイズの異なる棘を持つ）を確認したことはなく、遺跡から出土する本種の棘は打ち上げられたものを利用したと考えられる。

2) 微小貝類遺体から推測される遺跡周辺の環境、特に淡水の影響

今回の土壌サンプルからフローテーションで得られた貝類を表2に示した。少なくとも淡水貝類3種、陸産貝類10種が確認された。ただ、従来報告者は、最少推定個体数（MNI）で出土個体数を示してきたが、今回は貝殻の様々な部位を個別にカウントした同定標本数（NISP）で示してあるので、注意されたい。

遺物包含層のⅢ層のサンプルは、コラム3とウニ集中部の2地点で検討した。この層準では、ゴマオカタニシやスナガイ・オカチヨウジガイ類が優占し、コラム3で林縁に生息するゴマオカタニシが、ウニ集中部では開放地に生息するスナガイが最も多く、その組成は類似するものの少し異なっていた。優占種や両サンプルから林内に生息するゴマガイの一種や林縁に生息するキカイノミギセルが数%の割合で得られていることから、砂丘上でも遺跡は林に接していたと考えられる。両サンプルの相違は、地点間の微細な植生の違いや堆積時期の差（包含層内で

の上下の時間差)に起因すると考えられよう。また、ゴマオカタニシが優占する状況は、前述の用見崎遺跡の同時代の層にかなり類似している(黒住, 1998)

現地で、“灰層”の可能性の指摘されたII層の2つのサンプルからは、少数ではあったが、淡水産貝類が認められ、この部分に何らかの淡水の影響の及んでいることがわかった。ここで得られた3種の淡水産貝類は、水田や湿地のような止水的な環境に生息し、河川流心部のような流水には生息しないものである。つまり、2つのサンプルは、水田や湿地のような環境が遺跡の北西部に存在したことを示している。琉球列島の遺跡におけるこのような淡水産貝類中心の堆積物は、沖縄県北谷町の後兼久原遺跡でも認められている(黒住, 印刷中)。ただ、両サンプルとも陸産貝類も極めて多く、前述の開放地に生息するスナガイとオカチヨウジガイ類の2種で全体の80%以上を占めており、包含層に多かったゴマオカタニシは極めて少なく、林内に生息するゴマガイ類は1個体も得られなかった。これらのことから、両サンプルは、開けた環境を示していると考えられる。

そして下部のNo. 3では比較的陸産貝類の出土数が少なく、現地の観察でも堆積物には泥が多かったので、淡水の影響を強く受けた堆積物であると考えられる。一方、上部のNo. 1では、陸産貝類の出土数が多く、砂質であったことから、砂丘に遺跡北側の小河川が増水したときに泥を堆積させたものではないかと推測される。そうであるならば、上部のNo. 1は、むしろI層とするべきなのかも知れない。このように、微小貝類が残るような堆積物であったならば、これらの組成から、淡水環境を含め、ある程度遺跡周辺の環境を復元できることが示された。

また、地点7のサンプル中からは、炭化物が包含層と比較して極めて少なく、灰層でないことは確実であろう(表2)。このサンプルの上部では食用と考えられる古い海産貝類が得られ、下部では土器片も1片確認されたが、いずれもⅢ層由来のものと考えられる。そのため、この地点7の水田や湿地のような止水的な環境が遺跡とどのようにかかわっているかも不明である。今回II層とした淡水の影響のある層の形成年代は不明であるが、包含層よりかなり新しいのではないかと推測される。

まとめ

用安良川遺跡の食用貝類は、リュウキュウヒバリやマガキガイ・コウダカラマツが優占し、イノーのものが少ないという特徴を示し、近接した同時期の用見崎遺跡の組成と類似していた。ただ、これまで琉球列島ではほとんど報告されていなかったナガウニ類の廃棄集中部が確認された。ただ、ナガウニ類の利用方法は不明である。微小貝類から、包含層の時期には、遺跡の周辺には林が存在していたことが示された。その上部の泥を含む灰色を呈するII層からは、止水性の淡水産貝類が得られ、遺跡の北西部には水田や湿地のような環境が存在していたことがわかった。この堆積層の年代や遺跡とのかかわりは不明である。

引用文献

- 比嘉春美. 1977. 貝製品. In 渡喜仁浜原貝塚調査団(編), 渡喜仁浜原貝塚, 今帰仁村文化財調査報告書, (1):125-131, 133-135, pls. 34-37. 今帰仁村教育委員会, 沖縄.
- 伊是名貝塚学術調査団(編). 2001. 伊是名貝塚. 勉誠出版, 東京.
- 黒住耐二. 1995. 貝類遺存体. In 中山清美(編), 用見崎遺跡, 笠利町文化財調査報告, (20): 34-43. 笠利町教育委員会, 鹿児島.
- 黒住耐二. 1996. 用見崎遺跡のコラムサンプルから得られた貝類遺存体(予報). In 山田康弘・原田範昭(編), 用見崎遺跡, 考古学研究室報告, (31):31-37. 熊本大学考古学研究室.

- 黒住耐二. 1997. 1996年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体. In 若杉竜太・尾上博一(編), 用見崎遺跡 III, 考古学研究室報告, (32):35-41. 熊本大学考古学研究室.
- 黒住耐二. 1998. 1997年の用見崎遺跡調査で得られた貝類遺存体(予報). In 若杉あすさ(編), 用見崎遺跡 IV, 考古学研究室活動報告, (33): 38-45. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 2000. 1999年度のナガラ原東貝塚調査の食用貝類遺存体(予報). In 谷直子(編), ナガラ原東貝塚 2, 考古学研究室活動報告, (35): 45-54. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 印刷中. 沖縄における貝類遺体からみた湿地堆積物の検討—後兼久原遺跡のコラムサンプリング調査ー. In 後兼久原遺跡, 北谷町文化財調査報告書. 北谷町教育委員会, 沖縄.

表1. 用安良川遺跡のウニ集中部 (4/8 cm; 3600 cc) から得られた貝類遺体.

メッシュサイズ	9.5 mm		9.5+4 mm		生息場所 類型
	出土数	%	出土数	%	
軟体動物門					
腹足綱(海産)					
*リュウキュウウノアシ	1	1.85	1	1.04	I-1-a
*ツタノハ	1	1.85	1	1.04	I-3-a
コシダカサザエ			2	2.08	I-2-a
*イシダタミアマオブネ			9	9.38	I-0-a
*アマオブネ	5	9.26	5	5.21	I-1-b
*ニシキアマオブネ			2	2.08	I-1-c
コオニノツノガイ			1	1.04	I-2-a
*オニノツノガイ	1	1.85	1	1.04	I-2-c
イボタマキビ			1	1.04	I-0-a
*マガキガイ	11	20.37	11	11.46	I-2-c
*クモガイ	1	1.85	1	1.04	I-2-c
*ハナマルユキ	7	12.96	7	7.29	I-3-a
*スクミウズラ	1	1.85	1	1.04	I-2-c
*シラクモガイ	1	1.85	1	1.04	I-3-a
*ムラサキイガレイシ	1	1.85	1	1.04	I-3-a
*レイシダマシ	1	1.85	2	2.08	I-1-a
レイシダマシモドキ			1	1.04	I-1-a
*コオニコブシ	1	1.85	1	1.04	I-3-a
*イトマキボラ	1	1.85	1	1.04	I-2-a
*イボシマイモ	1	1.85	1	1.04	I-2-a
*ヤナギシボリイモ	1	1.85	1	1.04	I-3-a
*コウダカラマツ	6	11.11	7	7.29	I-1-a
腹足綱(陸・淡水産)					
カワニナ			2	2.08	IV-5/6
オオシマヤマタニシ			2	2.08	V-8
タメトモマイマイ			1	1.04	V-8
オキナワウスカラマイマイ			1	1.04	V-9
二枚貝綱(海産)					
*リュウキュウヒバリ	2	3.70	18	18.75	I-1-a
*シロインコ	2	3.70	2	2.08	I-3-a
*シラナミ	1	1.85	1	1.04	I-2-a
*イソハマグリ	7	12.96	7	7.29	I-1-c
*ナミコマスオ	1	1.85	2	2.08	I-1-c

多板綱(海産) *オニヒザラ?		1	1.04	I-1-a
合計出土数	54	96		
棘皮動物門 ウニ綱(海産)				
ナガウニ類(棘・板)	多数	多数		
パイプウニ(棘)	1			
節足動物門 甲殻類(海産)				
*カニ類(ツメ)	2	1		

*: 食用と考えられる種。出土数は最少推定個体数(MNI)

生息場所類型	0: 潮間帯上部	a: 岩礁/岩盤
I: 外洋-サンゴ礁域	1: 潮間帯中・下部	b: 転石
II: 内湾-転石域	2: 亜潮間帯上縁部	c: 砂/泥底
III: 河口干涸-マン Groove 域	3: 千涸口にのみ適用	d: 植物上
IV: 淡水域	4: 犬歯面及びその下部	
V: 陸域		

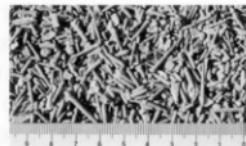


図 1. ウニ集中部土壤の2mmメッシュ上のナガウニ類。

表2. 用安良川遺跡のフローテーションで得られた貝類遺体。

地点 層序	地点7, №1 II層	地点7, №3 II層	コラム3, №1 III層	ウニ集中4/8cm III層
土壤量	1200cc	1400cc	1450cc	2050cc
出土数 %	出土数 %	出土数 %	出土数 %	出土数 %
腹足綱(淡水産)				
ヌメカラニナ		1		
ハブタエヒラマキ?	1	3		
ヒラマキモドキ		1		
腹足綱(陸産)				
ゴマガイの一類			13 8.13	21 7.72
コマオカタニシ	2 0.93	1 1.64	83 51.88	65 23.90
キカイノミギセル			5 3.13	22 8.09
ナタネガイの一類		4 6.56	3 1.88	6 2.21
スナガイ	160 74.07	39 63.93	33 20.63	86 31.62
オカチョウジガイ類	37 17.13	13 21.31	17 10.63	43 15.81
オカチョウジガイ類(卵)				4 1.47
ヒメベッコウ属類似種	8 3.70	1 1.64		1 0.37
ナガケシガイ		1 1.64	1 0.63	23 8.46
タメトモマイマイ	1 0.46			
オキナワウスカワマイマイ	3 1.39		3 1.88	
タメトモノオキナワウスカワ	5 2.31	2 3.28	2 1.25	1 0.37
陸産貝類合計	216 100.00	61 100.00	160 100.00	272 100.00
介形虫		2		
炭化物	5	2	24	
海産貝類*	1			52

出土数は、同定標本数(NSP)、*: メッシュ上に残ったもの。

第3節 安良川遺跡から出土した脊椎動物遺体群の概要

樋泉 岳二（早稲田大学非常勤講師）

安良川遺跡は奄美大島北部笠利町用の海岸砂丘上に形成された兼久式期の遺跡である。ここでは本遺跡の2003年度発掘調査で採集された脊椎動物遺体（骨類）の同定結果について概要を述べる。

1. 分析資料

採集された骨類には、堆積物サンプルの水洗によって採集された資料（以下「水洗選別資料」と、発掘時に手で拾い上げられた資料（以下「現地採集資料」）がある。

水洗選別資料については、30cm角のコラムをB-4区に2箇所（サンプルNo.1・2）、D-1区とE-1区の境界付近から検出された「ウニ溜まり」の北側に1箇所（サンプルNo.3）、A-1区に1箇所（サンプルNo.4）の計4箇所設定し、遺物包含層のサンプルを採取した。またA-1区北壁（「No.4脇壁面」）および調査区南側崖面のD～E区付近（サンプルNo.5）において遺物包含層のブロックサンプルを採取した。さらに、「ウニ溜まり」の堆積物についてもサンプルを採取した。そのほか調査区南側崖面のC区付近において遺物包含層下の白色砂層中から検出されたレンズ状の腐食質暗色砂層（「南側砂層中レンズ」）からもブロックサンプルを採取した。これらのサンプルは自然乾燥・計量の後4mm・2mm・1mm目の試験フリイを用いて水洗し、残留物の中から骨類を抽出・同定した。採取した堆積物サンプルは総計約170kg（乾燥重量）であり、これまでに約150kgについて分析を終えている（表1）。

2. 分析結果

水洗選別資料：約150kgの堆積物サンプルを1mmメッシュまで用いて水洗したにもかかわらず、検出されたのは微量の魚骨・獸骨の小破片にとどまった（表1）。種類を特定できた資料はハタ科？2点とアオブダイ属1点のみで、ほかに未同定の真骨類椎骨が2点ある。

現地採集資料：魚類32点、ウミガメ類2点、哺乳類18点が採集されている（表2）。魚類ではブダイ科が9点と最も多く（前上頸骨・歯骨・咽頭骨ではアオブダイ属のみが確認されている）、ベラ科・ハリセンボン科が5点でこれに次ぐ。ベラ科下咽頭骨は3つの肥大歯をもつタイプで、歯の配置などからみて少なくとも2種が含まれるが、種名は特定できていない。その他、ハタ科・ギンガメアジ属・エダイ科・クロダイ属・イシダイ属が各1点確認されている。哺乳類は大半がイノシシ（およびそれと考えられる長骨破片）であり、他にジュゴンの肋骨と思われる小破片がみられた。

3.まとめ

今回の本遺跡の発掘では、大量の堆積物サンプルを詳細に水洗したにもかかわらず、骨類はほとんど検出されなかった。また現地採集資料についても、約280m²の発掘面積からすれば出土量はごくわずかなものであった。近隣の同時代（兼久式期）遺跡であるマツノト遺跡・用見

崎遺跡の状況をみると、マツノト遺跡では大量の魚骨・獸骨類が現地採集されており（現在分析中）、用見崎遺跡でも水洗選別によって多數の魚骨が検出されている（樋泉 1997・1998）。本遺跡では、これらの遺跡に比べ骨類が極端に少ない。このように、魚骨・獸骨類の出土量に遺跡間で著しい違いが認められる点は本地域の特徴であるとも考えられる。今後はその原因について、兼久式期内での年代差、周辺環境の差、遺跡間または遺跡内空間における機能差などから検討を加えていく必要がある。

参考文献

- 樋泉岳二（1997）「用見崎出土の脊椎動物遺体（予報）」『研究室活動報告32』熊本大学文学部考古学研究室
 樋泉岳二（1998）「用見崎遺跡出土の脊椎動物遺体（第二報）」『考古学研究室報告第33集』熊本大学文学部考古学研究室

表1 用良川遺跡の堆積物試料から水洗選別で検出された脊椎動物遺体 fr：部位不明小破片、-：未分析

試料№	試料乾重量 g	魚骨	魚骨 (同定不可)	獸骨 (同定不可)	破片數	
					合計	
№1-1	9870	0	0	fr1	1	
№1-2	8640	0	0	0	0	
№1-3	8490	ハタ科？主上顎骨L1	椎骨2, fr1	0	4	
№1-4	9690	0	椎骨2, 鰭棘1, ft2	0	5	
№2-1	9620	0	0	0	0	
№2-2	8010	0	椎骨1	fr1	2	
№2-3	9590	未同定腹椎1	fr2	fr1	4	
№2-4	8350	未同定腹椎1	0	0	1	
№3-1	9150	0	0	0	0	
№3-2	8990	0	0	0	0	
№3-3	10190	ハタ科？尾椎1	0	0	1	
№4-1	8570	アオブダイ属上頸骨1	0	0	1	
№4-2	8380	0	fr1	fr2	3	
№4-3	9360	0	fr2	fr1	3	
№4 脇壁面	11270	-	-	-	-	
№5	7710	0	0	0	0	
ウニ殻0-4cm①	3100	-	-	-	-	
ウニ殻0-4cm②	2510	-	-	-	-	
ウニ殻4-8cm②	2030	0	0	0	0	
ウニ殻4-8cm②	3030	-	-	-	-	
ウニ殻8-12cm	4090	0	0	0	0	
ウニ殻12-16cm	2960	-	-	-	-	
南側砂層中レンズ	5590	0	0	0	0	
破片數合計	169,190	5	14	6	25	

表2 用安良川遺跡の現地採集試料から検出された脊椎動物遺体

*m(p) : 近位側骨幹, m(m) : 骨幹中央部, m(d) : 遠位側骨幹

グリッド	分類群	部位	位置*	左右	数	備考
B4	ハタ科	前上頸骨		L	1	中型
D4-IV	ギンガメアジ属	歯骨		L	1	大型
D2-III	フエダイ科?	前上頸骨		L	1	
C2-III	クロダイ属	主上頸骨		R	1	
C2-IV	イシダイ属	歯骨		R	1	大型
DF-III-F4	ベラ科A	下咽頭骨		-	1	中型
B4	ベラ科A	下咽頭骨		-	1	やや大型
D2-III	ベラ科A	下咽頭骨		-	1	中型
C2	ベラ科B	下咽頭骨		-	1	中型
C3-I	ベラ科	頸骨	破片	?	1	
C3	アオブダイ属	前上頸骨		R	1	大型
C2-IV	アオブダイ属	前上頸骨		R	1	中型
C3	アオブダイ属	歯骨		L	1	大型
C2-IV	アオブダイ属	歯骨		R	1	やや大型
C3	アオブダイ属	上咽頭骨		L	1	大型
C3	アオブダイ属	下咽頭骨		-	1	大型
D2-III	アオブダイ属	下咽頭骨	破片	-	1	大型
D2-III	ブダイ科	頸骨	破片	?	1	
D2-III	ブダイ科	尾椎		-	1	やや大型
D4-III-F4	ハリセンボン科	前上頸骨?		L+R	1	焼, 中型
D4-I	ハリセンボン科	歯骨?		L+R	1	中型
D2-I	ハリセンボン科	歯骨?		L+R	1	焼, 大型
A2-I	ハリセンボン科	前上頸/歯骨	破片	L+R	1	小型
B4	ハリセンボン科	前上頸/歯骨	破片	L+R	1	やや小型
C3-I	真骨類・保留	不明		-	1	ニザダイ種類?
A2-I	真骨類・同定不可	前上頸骨	破片	R	1	ハタ科?
D3	真骨類・同定不可	歯		-	1	
A2-I	真骨類・同定不可	尾椎		-	1	おそらくハタ科
D2-III	真骨類・同定不可	椎骨	破片	-	1	おそらくブダイ科
A2-I	真骨類・同定不可	椎骨	破片	-	1	おそらくブダイ科
C2-III	真骨類・同定不可	鱗鱗		-	1	
C2-II	真骨類・同定不可	不明	破片	-	1	
D2	ウミガメ科	上腕骨	m(p)-m(d)	L	1	中型
C2-IV	ウミガメ科	肋骨板?	破片	?	1	
D4-I	小型哺乳類/鳥類	不明(長骨)	m	?	1	
C1-I	イノシシ	下頸? C		L?	1	♀?
B3	イノシシ	下頸M2		L	1	
D2	イノシシ	下頸骨	関節突起	R	1	
A2	イノシシ	上腕骨	m(p)-d	L	1	
D2	イノシシ	大腿骨	m(m)	R	1	骨端癒合残存
A2	イノシシ	脛骨	m(d)	L	1	
C2-III	イノシシ	踵骨	関節部	R	1	
D2	イノシシ?	不明(長骨)	破片	?	1	
C2-III	イノシシ?	不明(長骨)	破片	?	1	
A4-II	イノシシ?	不明(長骨)	破片	?	1	
C2	イノシシ?	不明(長骨)	破片	?	1	
?	イノシシ?	不明(長骨)	破片	?	2	
D2	イノシシ?	不明(長骨)	破片	?	1	
D5-I	ジュゴン?	肋骨?	破片	?	1	
B4-IV	ジュゴン?	肋骨?	破片	?	1	
D4-III-F4	哺乳類・保留	不明			1	ジュゴンか
D3-II	哺乳類・同定不可	不明	破片		1	

ま　と　め

発掘調査は短期間であったが、パソコンと光波測量を使用して遺物取り上げを行った。図面作成にかなり効果があった。しかし、1日の作業を終え、その日の内にパソコンに取り込んだデータを処理する作業を終えないと翌日パソコンが使用できない。そのため遺物整理台帳作成とデータ処理の作業が夜遅くまで続くことになった。今回の遺物出土状況図などはこうした苦労の成果である。

兼久式土器の分類については鉢形、壺形に形式分類を行い、鉢形・壺型をさらに型式分類を行なった。できるだけ器種、器形、文様、胎土などの属性をデーターとして取り込み、口縁部の器形、文様特徴と底部の器形特徴に分類し%表示を行なった。これは口縁部から底部まで復元可能な資料の出土がなかったため、胎土による共通性を求めた。その結果は以下のとおりである。

1. 形式的に鉢形土器と壺型土器に大別される（第IV章4節土器形式分類の1、壺形土器の形式分類と2、鉢形土器の形式分類で述べている。）
2. 壺形土器と鉢形土器は胎土でも分類でき砂質が鉢形土器に多く、泥質が壺形土器に多い結果を得ている。（第4、7、8表に胎土分類%を表示している。）
3. 鉢形土器は深鉢型と浅鉢型、小型鉢型に分類される（第IV章4節土器形式分類2、鉢形土器の形式分類で述べている。）
4. 鉢形土器の口縁部の特徴は直口と外反が主流をなし、各文様の特徴も%提示を行なった（第10表口縁タイプ分類において%が提示を行い、主流になる土器を求めた。）
5. 鉢形土器の底部はくびれを有さない直行とくびれ平底に分類される。くびれを有さない底部には小型土器も含まれている（本文底部分類において述べており第34図第35図において形式分類を行なっている。）
6. 壺形土器の口縁部は片口、方形、円形、広口口縁などに分類される。文様の特徴も鉢形土器と共に通する（本文壺形土器の形式分類において述べており、第36図土器形式分類と第37図壺形土器形式分類において第5様式まで分類している。）

以上の結果口縁部による器種、器形文様の特徴、底部による器種、器形、整形等の型式分類を行い、あわせて胎土分類による%を提示した。その結果本文で示したように壺形土器、鉢形土器とも第3様式、第4様式、第5様式がこれまでの兼久式土器として扱われている特徴を示している。第1様式、第2様式については、スセン當式土器と類似するが、焼成、胎土が第3、4、5様式に共通している。脚台はスセン當式土器に胎土・焼成とも類似しており、第1、2様式はスセン當式と兼久土器の間にに入るタイプとも考えられる。層位的にはひとつつの遺物包含層であり、時間差はさほど大きくなないとと思われる。

以上のように土器の「属性」を述べ、安良川遺跡の土器型式を第5様式に分類を行なった。

今後は奄美各地から出土している兼久式土器の型式分類と属性分析を行い、型式編年の確立が必要とされる。今回の型式分類で目指したもうひとつの目的は、兼久式土器の発生から終焉まで、いくつかの型式の連なりによって構成される時間的変遷を表す指標をひとつの試みとして示すことであった。兼久土器の分類については安良川遺跡から得たデーターをもとに後日詳細を報告す

ることにする。

発掘調査報告書としては遺物、遺構の事実記載と共に資料のデータ化もある。考古資料のみならず自然遺物の分析結果は兼久式土器の人々の行動方式を復元する資料になる。植物遺体、動物遺体、貝類遺体によるフローテーション法は、ここ数年の調査で農耕や植生などの自然環境にも大きな成果を挙げ、自然遺物と考古遺物の比較も重要である。

砂丘遺跡については今後とも砂丘遺跡の基本層序を作成し、他地区との対比とその特徴を明らかにする。そのことによって自然環境から得られる砂丘形成の特徴から時代区分が可能になり、土器型式と合わせた編年確立の資料にもなり得ると考える。

本報告書に記載できなかった大半の基礎資料のデーターは、笠利町歴史民俗資料館においていつでも閲覧可能の状態にしておきたい。本報告書は兼久式土器研究資料のひとこまとして、広く愛されて欲しいと願う気持ちもあり、それが本報告のもうひとつのねらいでもある。

図 版



遺跡南側より遠景



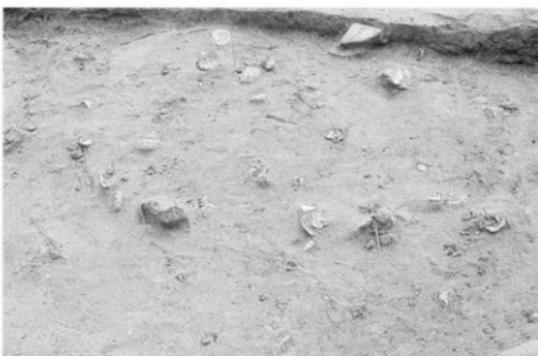
遺跡南側より近景



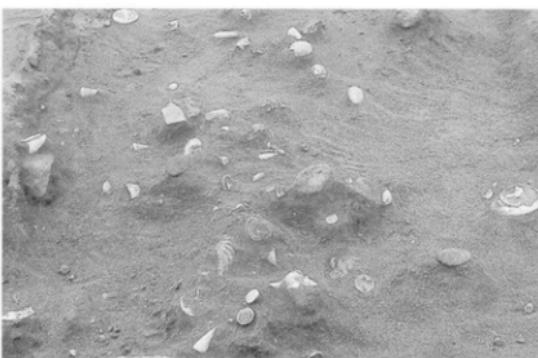
東側土層断面図



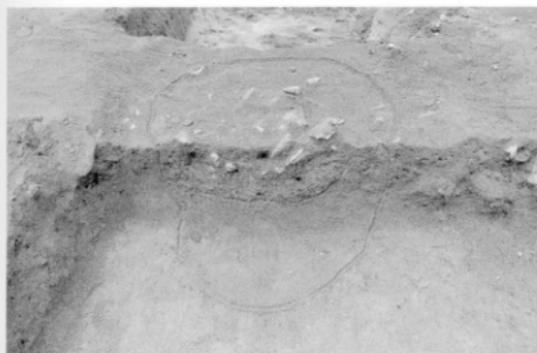
A・B ライン西側より



遺跡出土状況



遺物出土状況



ウニ土坑出土状況



ウニ土坑近景



平底土器出土状況



土器出土状况



有孔土器出土状况



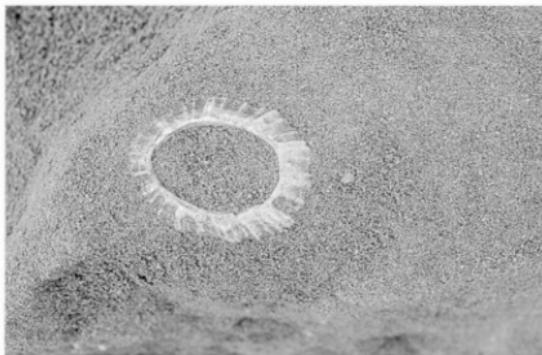
丸底土器出土状况



無文貝符出土狀況



有孔貝出土狀況



オオツタノハ貝輪出土状況



貝ヒ出土状況



土層断面に検出された
夜光貝、オカヤドカリビット



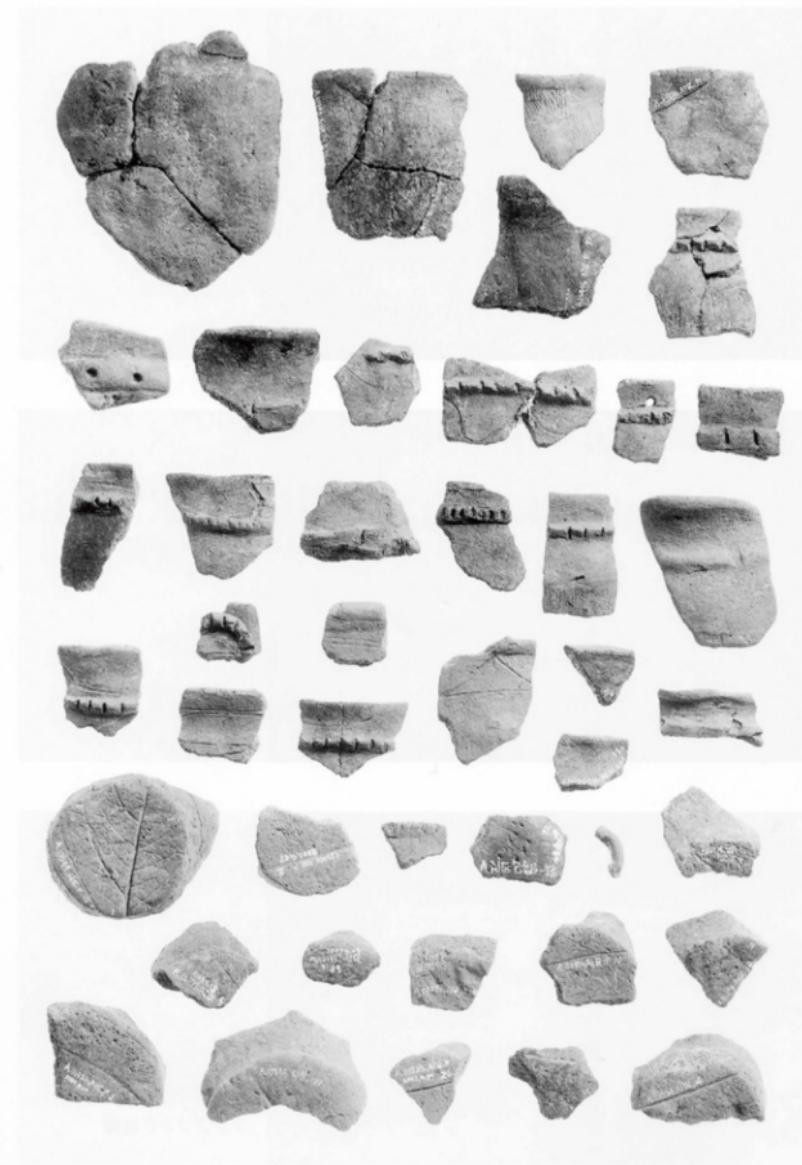
石器出土状況



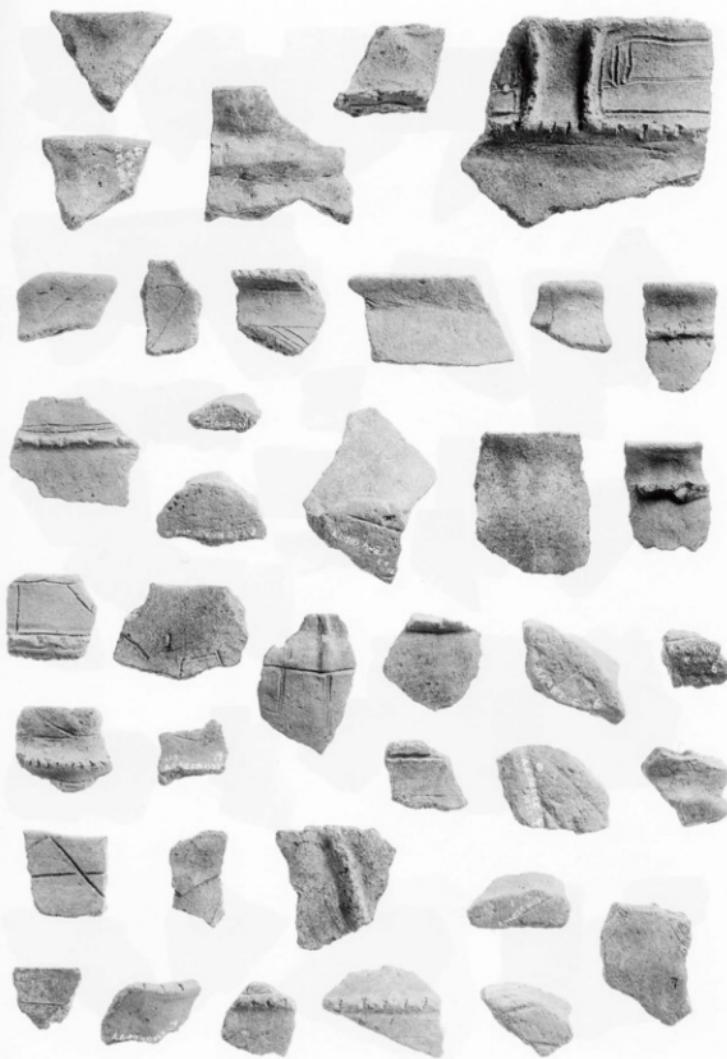
ツリバリ出土状況



共同調査員の
サンプリング協議



A-1 区出土土器図版



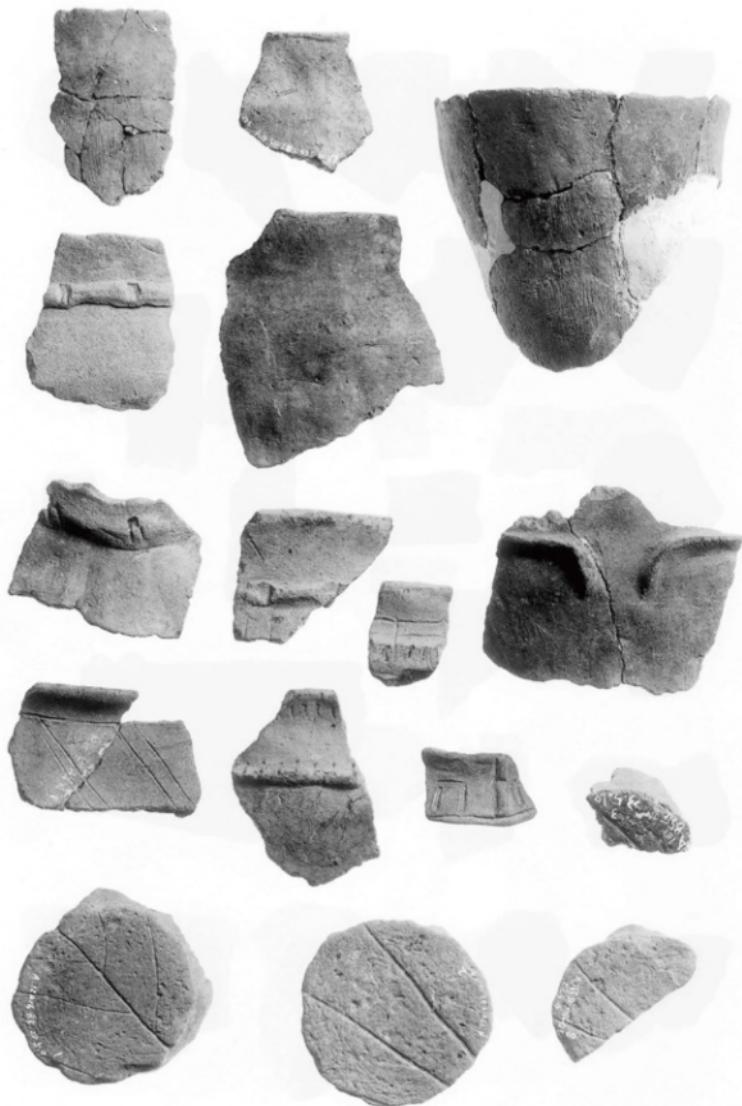
A-2～A-4 区出土土器図版



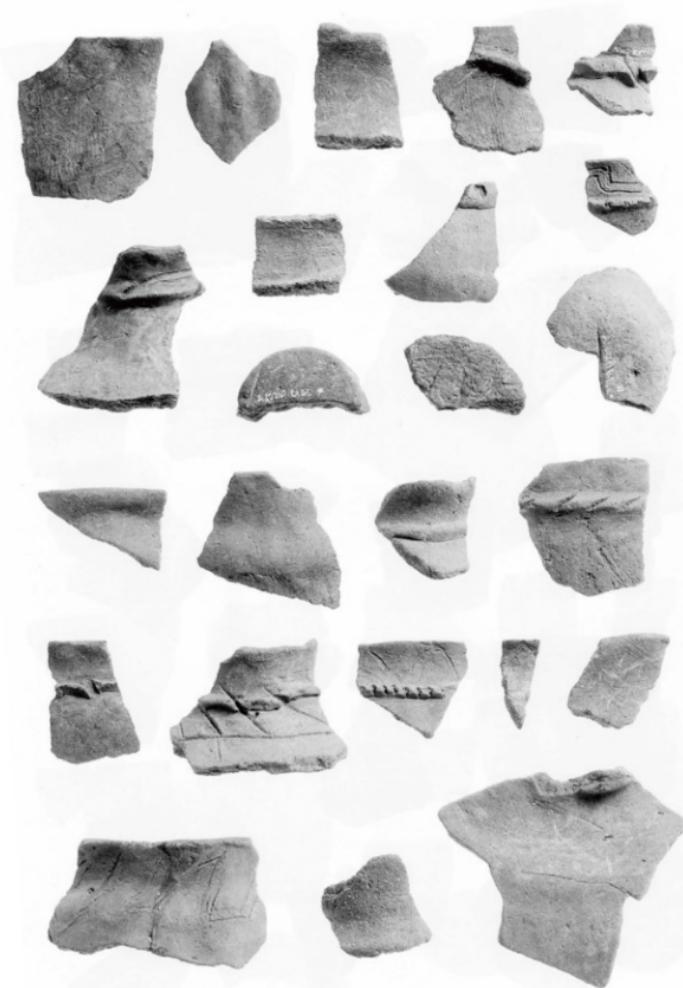
B-1 ~ B-3 区出土土器图版



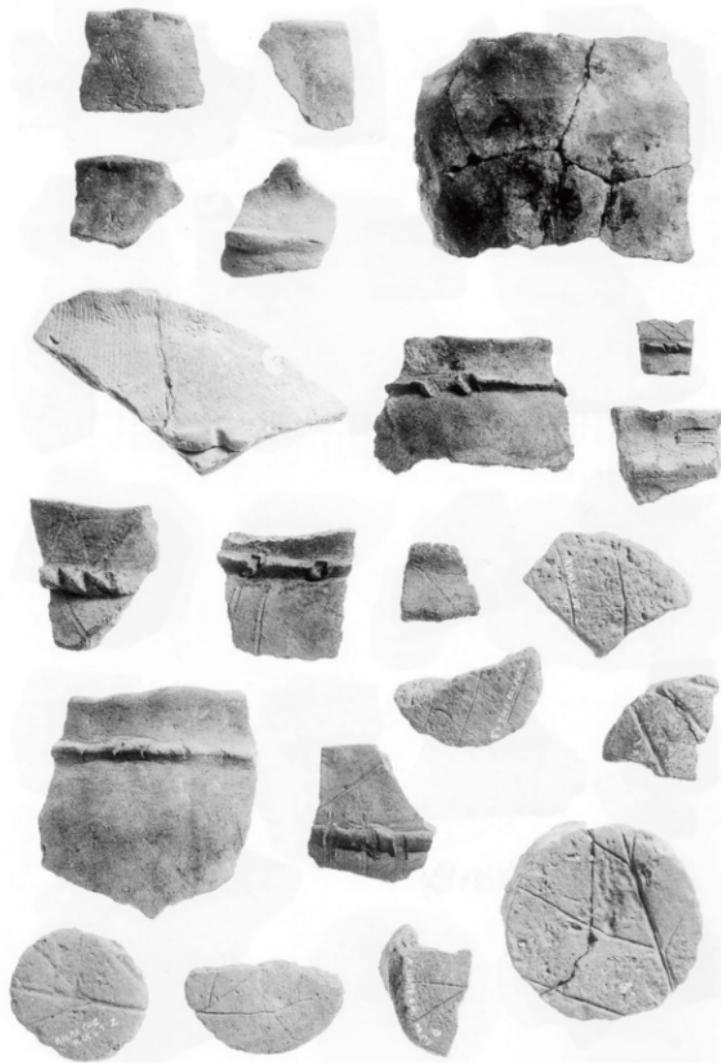
B-4・B-5区出土土器図版



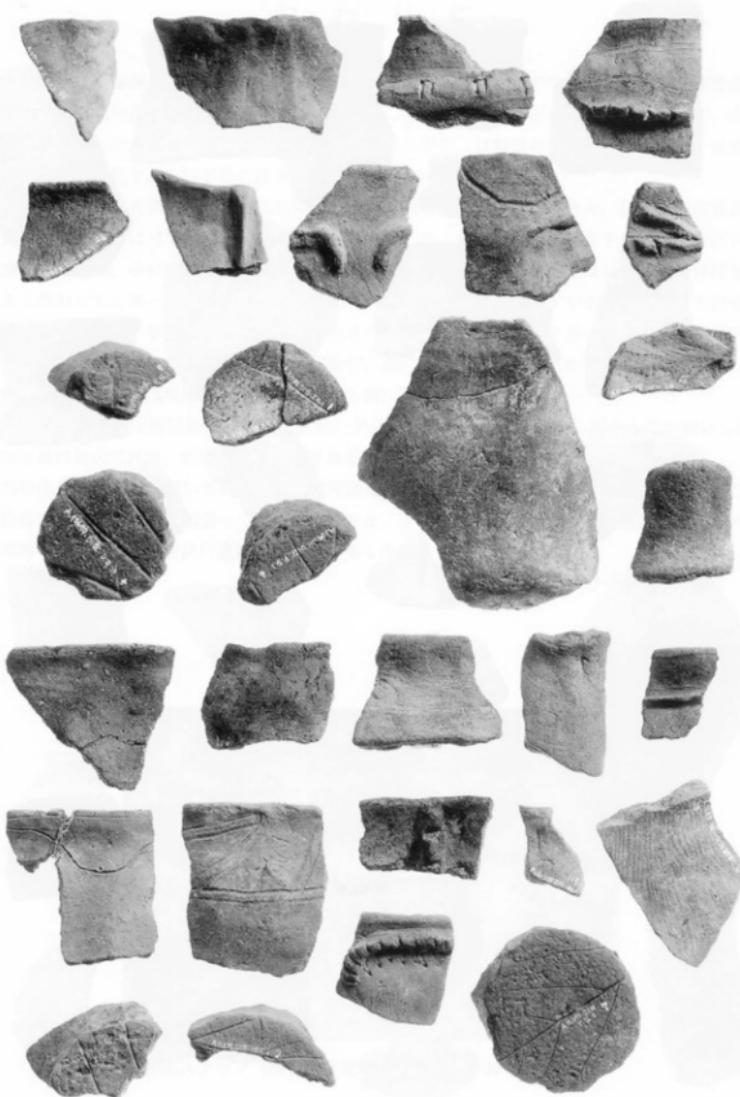
B-5 区出土土器图版



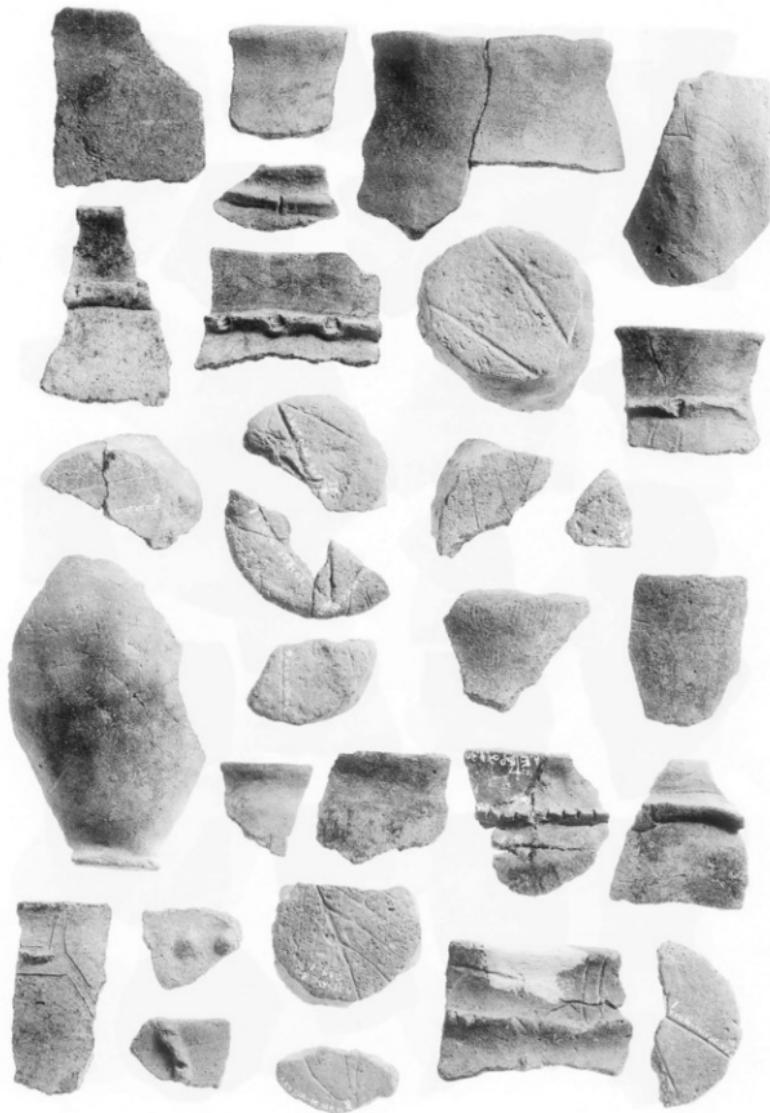
C-1・C-2区出土土器図版



C-2区・C-3区・C-4区出土土器図版



D-1 区・D-2 区出土土器図版



D-3区・D-4区・ベルトD1～E1区・E-1区・E-2区出土土器図版

おわりに

本報告書は発掘調査を援助していただいた熊本大学考古学研究室の学生、大学院生、慶應義塾大学大学院生緑川弥生さん、そして甲元眞之先生、木下尚子先生などの調査協力の賜です。有り難うございました。調査指導と動物依存体の樋泉岳二先生、貝類依存体の黒住耐二先生、植物依存体の高宮広土先生からは玉稿を頂き、有り難うございました。

本遺跡の報告書を作成するに当たり岡山県矢掛町教育委員会の西野望さん、伊仙町教育委員会の新里亮人さんにはパソコンデーターを使わせて頂いた。また、整理作業を手伝っていただいた加茂川路世さん、中村有里さん、前田寿子さん、事務の諏訪しげみさんをはじめ多くの仲間をたくさん煩わせてしまった。発掘当初は連休ということもあり地元の方々や小・中学校の生徒の見学者も多かった。小学生による発掘体験学習を行うなど連日にぎやかであった。また大島地区的教育委員会、担当者、竜郷町、名瀬市、宇検村、瀬戸内町、喜界町などからの視察もあった。名瀬市の高梨修さんには現場に来て頂き、助言も頂いた。

出土遺物の写真は鹿児島県埋蔵文化財センター鶴田静彦さん、横手浩二郎さんにお願いした。表紙写真は地元写真家、浜田康作さんの写真を使わせて頂いた。

整理作業を手伝って頂いた3人には無理難題はもちろんのこと休日返上までお願いして、この報告書を刊行するために頑張っていただきました。そして、明記できなかった諸関係者の方々にも感謝申し上げます。安良川遺跡に携わった多くのスタッフに深謝！

アリガサマリヨウタ。



発掘スナップ（調査状況を考え込むフィールドマスター）

笠利町文化財報告書 第27集

安良川遺跡

ARAGOU SITE

発行 2005年3月

編集 鹿児島県笠利町教育委員会
〒894-0512
大島郡笠利町大字中金久 52-6

印刷 株式会社トライ社

